

動の主體の對立が現出したことである。

この時期の社會的特質は前期のそれを一層濃厚にしたもので、かの金融界の大混亂にその一端を見るやうに、今やわが國の資本主義は急速な速度をもつて崩壊への道をたどり、更に支那の反帝國主義運動・國民革命運動は、その崩壊を更に重壓し、それを防止しようとして田中軍閥内閣は、極端な反動政治を敷き、労働階級の言論集會をほとんど完全に弾壓してゐる。この重苦しい空氣の中にあつて、プロレタリア藝術運動は再びその活躍期に入つたのである。

無産階級運動の方面では、労働者農民の共同戦線黨として、謂ゆる全無産階級的政治闘争主義によれる労働農民黨が漸くその基礎を確立し、組合主義政治闘争を指導精神とする日勞黨と對立し、更に社會民衆黨及び日本農民黨の如き小ブルジョア黨と對立闘争してゐる。プロレタリア藝術運動がこの期において政黨運動と積極的に結合して來たのはまた當然と言はなければならぬ。がい。がこゝに注意すべきことは、政治運動の方面で、全無産階級政治闘争の理論を機械的に鵜呑にし、空疎な理論闘争に陶醉して、極左黨的自慰にふけてゐる分子の存在することである。而してそれは理論拘泥主義となつて現はれ、躍氣的分裂主義となつて現はれてゐる。この小兒病的逸脱が、プロレタリア藝術運動の陳營内にも反映して來たことは、これもまた自然と言つてよ



いであらう。

この時期の文壇を一瞥すると、第二期の末期當時の沈滞が更にその度を加へ、創作界に何等目ざましい活動がなく、老大家のマンネリズムを渴仰して居るにとどまり、文藝批評の方面でも作家の感想的批評に一時の不満をいやしてゐるに過ぎない。そしてそこで積極的に行はれてゐるものは、明治・大正の文學の總決算である。プロレタリア藝術運動の第三期の活動は、當然この文壇へ大きな衝撃を與へなければならなかつた。文壇はまた新らしくプロレタリア文藝の存在權を云々し、個々のプロレタリア作品に向つて注意の眼を向け始めた。が、この期のプロレタリア藝術運動は最早や文壇内にとどまつてゐるものではなくなつた。したがつて文壇が注目し、批評し得る範圍は、プロレタリア藝術運動の一部分に過ぎなくなつたのである。たとへば、この期の最大の特徴たるプロレタリアの演劇運動——労働者農民の間での——の如きは、彼等の視野の及ぶところではないのである。

第三期のプロレタリア藝術理論は、私の『自然生長と目的意識』の論綱にその端を發したやうに見える。無政府主義者はこの論綱を誤認して、自然生長を否認するものとして論難した。一方コンミニュニストの陣營にあつてはこの論綱の一般論的であるの故をもつて、折衷主義的であると



して、現在の政治闘争のモメントに對して具體的目標を掲げよと要求した。私はこゝでこれらの非難に答へることを差控へるが、その論綱は單にマルクス主義的の藝術理論の基礎として役立つに過ぎないのであつて、現在のモメントに妥當した藝術運動の目標を規定するにはこの基礎を確實に把握する必要があることは言ふまでもないことで、それに注意を促すだけのものだつたのである。マルクス主義藝術運動の陣營は、これに聯關しこれから伸展した謂ゆる理論闘争の結果二つに分裂してしまつた。一つは『勞農藝術家聯盟』の理論であり、他は『日本プロレタリア藝術家聯盟』の理論である。前者は藝術運動をもつて飽までも全無産階級政治闘争の一翼とするが、藝術運動には藝術運動としての機能があり、それを果す特殊組織がある、その機能と組織とによつて始めて、一翼たる使命を完全に果すことが出來ると主張する。それに反し後者は、藝術運動の特殊の機能と特殊の組織とを、事實において認めず、直ちに機械的に藝術を武器として全無産階級政治闘争に結びつかうとする。この兩者の見解は、各々まだ十分に發展されず、したがつて分明でない部分が多いが、その對立の基礎は十分明白であると言つてよい。即ちその對立は、政治的見解にあると言ふよりも、ヨリ多く藝術運動の理論と實踐の範圍に存するものである。一は藝術運動の特性に十分に於て周到な注意を拂ふことを要求し、他はそれに無視的態度を執る。こゝ



に藝術運動としての明白な對立が存するわけである。この對立はプロレタリア藝術運動内部の混亂でも何でもなく、マルクス主義藝術運動の發達の一定の段階において當然來るものであつて、この各々の理論は實踐を通じて始めて補正され、やがてその對立から新しい進展統一が生れ出るものである。この期の藝術理論にはこの外に、藝術の様式論に立入つたものも見受けられて來たが、まだ何ほどの發展も見えてゐない。

この時期にはいま述べた『勞農藝術家聯盟』と『日本プロレタリア藝術家聯盟』との二つのマルクス主義藝術團體の外に、それに先立つて第二期において完全にコンミニストと分離したアナキスト及びサンデカリストが無産派藝術聯盟なるものを組織したが、それがまた分裂してしまつた。元來が集團主義に基づかない藝術理論の把握者が何等かの必要の手で結合したものであるから、この分裂は當然であらう。かくてこの團體は今や有名無實なものであつて、プロレタリア藝術運動の内部には、マルクス主義藝術運動における『勞藝』と『プロ藝』との對立があるばかりである。

この時期の創作活動は今日までのところ、相當に旺盛ではあるが、第二期のそれよりは内容及び様式において餘り進んでゐると思はれない。新らしい作家にしてもまだ出現してゐないが、



第二期に生れ出た作家が、いづれもその内容及び様式において、従來の自然生長的な行き方に疑問を抱いた結果、一種の行詰りを經驗してゐることは事實である。この行詰りはこれもまた當然なものであつて、この新らたな時期における創作活動が、第二期の延長であつてよい筈はないのである。が、一方にはこの行詰りを經驗せず、機械的に政治闘争と結合せんとする小兒病的な意識から、單なる宣傳藝術・觀念藝術を生産して、この時期に妥當した藝術だと考へてゐる者を見出す。それはその抱く藝術理論からの産物ではあるが、決して正しい意味のプロレタリア藝術ではないであらう。

プロレタリア藝術運動の第三期の目ざましい現象は、何と言つても演劇運動である。この運動は、第一期・第二期には見られなかつたもので、藝術運動の場面の廣汎になつたことを語るものであり、かねてプロレタリア藝術運動が、労働者農民に接近して來たことを示すものである。その演劇の内容にはまだ眞に見るべきものがないとしても、『前衛座』『プロレタリア劇場』が労働者農民の間に這入つて行つて、直接に訴へかけるにいたつたことは、廣く演劇の上からも意義あることでなければならぬ。プロレタリア藝術は、第三期に入つて始めて、その目標とする讀者と觀者に接近することが出來たのである。



私はこれで日本のプロレタリア藝術運動が歩いて來た道を、一應はたどつて見た。そして私の見解をも加へて、その中に筋道をつけて來た。私のつけた筋道は或は間違つてゐるかも知れない。しかしながら日本のプロレタリア藝術運動が、その時期々々に於いて、いかなる社會的條件の下に、いかなる無産階級運動の條件に應じ、いかなる文壇の空氣の間に、進展して來たかはほゞ理解されやうと思ふ。

凡ての運動に於いてそうであるやうに、プロレタリア藝術運動にも、多くの過誤と迷行があつたでもあらう。或はまたその正體の見失はれるまでに多くの夾雜物がふくまれてゐたでもあらう。

否、現在でもそれが無くはないであらう。しかし日本のプロレタリア藝術運動は、確かにそれらの過誤迷行を是正し、それらの夾雜物を鬭争の過程において艾除して來て居り、そして太い足跡を残して歩いて來てゐると思ふ。その一時の過程を見、瞬間の夾雜物を見て、その進行の太い足跡を見得ない者は、再び云ふ、樹を見て森を見ざるの徒である。(二年九月)



THE HISTORY OF THE UNITED STATES OF AMERICA

CHAPTER I  
THE DISCOVERY OF AMERICA

It is a well-known fact that the discovery of America was made by Christopher Columbus in 1492. He was an Italian explorer who sailed across the Atlantic Ocean in search of a westward route to the Indies. On October 12, 1492, he landed on the island of San Salvador in the Bahamas.

Columbus's discovery of America opened up a new world of exploration and trade. It led to the establishment of colonies and the eventual formation of the United States of America.

The discovery of America was a turning point in world history. It marked the beginning of a new era of global exploration and the eventual unification of the world.

The discovery of America was a great achievement of the human spirit. It showed that there were still unknown lands and peoples waiting to be discovered.

The discovery of America was a great triumph for the human race. It was a testament to the courage and determination of the explorers who dared to venture into the unknown.

The discovery of America was a great blessing for the world. It brought new ideas, new cultures, and new opportunities to the people of the world.

The discovery of America was a great gift to the world. It was a gift of knowledge, of discovery, and of hope.

The discovery of America was a great honor for the human race. It was a honor that will never be forgotten.

The discovery of America was a great joy for the world. It was a joy that will always be remembered.

The discovery of America was a great pride for the human race. It was a pride that will always be cherished.

The discovery of America was a great glory for the world. It was a glory that will always be celebrated.



## 第三部

### 文學運動と政治の實踐について

#### 一

大山、上村、細迫氏等が、こんど合法的大衆黨新勞農黨をつくると宣言した。これは、從來の合法性利用を否定し、合法的大衆黨を『官許黨』をくさしてゐた氏等にとつては、文字通りに『生命がけ』の大旋回である。だが私はこゝでこの大旋回について批評しようとするのではない。この大旋回からまき起る大旋風のために、プロレタリア文學運動の内外において現はる可き、乃至は既に現はれて來てゐる諸現象について述べて見たいのである。

この勞農黨樹立運動にたいするナツプの決定的態度は、私はまだこれを耳にしてゐないが、もしナツプが、その理論に一貫性を保つて行かうとすれば、從來の合法政黨無用論の當然の結論と

文學運動と政治の實踐について



して、その運動に決定的に反対の態度をとることは、ほど明白であると言つてよいであらう。(そのことが現在わが國の無産階級運動にとつて、正しいか正しくないかは、別個の問題として)もしナツプがこの豫想に反して、この大旋回と共に大旋回して、新合法的大衆黨支持を宣言するならば、尠くともこの團體の政治的見解の一貫性は失はれることとなる。特に新勞農黨の提唱者等が、『×××の介在を許さず』と公に宣言するやうな、かつてわが國の大衆政治運動に見ない底の階級的大退却を示してゐる場合、ナツプの執る態度が決定的反対のそれであるべきは、疑ひを挟む餘地のないことと言つてよいであらう。

この現象はわがプロレタリア文學運動の内外に、どう言ふ問題を提供するか、また現に提供する兆候が見えてゐるか？

大山氏等のこの大旋回は、政治運動における極端な御都合主義を一般に印象せしめる。これはいかにも自然なことで、つい半歳、二三ヶ月まへまで、合法的大衆黨の階級的意義を全部的に否定してゐた氏等が、いま唐突にその態度をすてて、合法的大衆黨の組織に着手することは、尠くとも御都合主義と目される要素が含まれてゐる。一般がこれを誇張して考へるのは無理のないことである。そこで、ナツプが決定的反対を示した場合でも、或は豫想を裏切つて支持に旋轉した



場合にはなほさら、政治運動の御都合主義にたいしてプロレタリア文學運動は追隨すべきでない、と言ふ議論が生れる。即ち一種の政治中立が要求されて來るのである。

## 二

この要求は、私の見るところでは、一種の氣分を表現してゐる以外には、意味のないものである。一口にプロレタリア政治運動と言ふけれども、その意味する内容は極めて廣い。合法的大衆黨の運動は、その極めて廣い運動の一部分、一分野に過ぎないのである。そこで合法的大衆黨の運動に限つて問題を取扱つて見れば、プロレタリア文學團體は、必ず或る特定の合法黨に歸屬し、乃至は、それを支持しなければならぬと言ふ原則はない。或る場合には一つの黨としては特定の何れの黨にも歸屬しない場合も考へられる。即ち何れの合法黨も、最早階級に意義を失つた場合がさうであり、さう言ふ場合は、合法的大衆黨において十分に可能なのである。この場合プロレタリア文學團體は、政治中立の態度だと言ふことは出来るがそれは飽までも一つの黨としての特定の黨に關してのことであつてプロレタリア政治運動に關してのことではない。例へば、プロレタリア文學團體は、一つの黨としての特定の黨は之を支持しないが、その内部の左翼先進分

文學運動と政治の實踐について



子を支持するといふ場合、又は存在する諸合法黨内の凡ての先進分子を支持するといふ場合が、あり得る。この限りにおいても決して政治中立ではないのである。否、或る黨を支持するよりも、ヨリ積極的な政治参加であると言つてよい。

であるから、プロレタリア文學團體の政治中立が、或る場合に要求されていゝのは、合法的大衆黨の關する範圍だけのことである。プロレタリア政治運動から、プロレタリア文學團體は中立すべしと言ふのは、對象の範圍を見極めない淺論である。

プロレタリア文學團體は、マルクス主義の團體である以上、プロレタリア政治運動と結合し、連絡し、共に進むことはその本質である。プロレタリア文學團體は、いづれへの政治運動にも連絡、結合を斷つて、直接にプロレタリア大衆に呼びかけよ、と言ふやうな要求は、プロレタリア政治運動の大衆性を理解せず、その運動の一部分たる合法的大衆黨の運動を誇大して考へ、且つ大山氏等の大旋回に目まひを感じて、思はず發せられた極く善意的な言葉以外のものではない。

誤解の起らぬために言つておくが、プロレタリア文學團體はプロレタリア政治運動と結合し、連絡し、共に進むのがその本質であり、何等かの政治運動と常に結合する約束をもつてゐるとは言つても、その團體の一切の文學的實踐がことごとくその特定の政治運動の當面の目標に奉仕す



べきだとも、奉仕し得るとも言ふのではない。文學的實踐は、その政治運動の當面の目標をも中に含んで、更に空間的に言つても、時間的に言つても、廣く、且つ遠い階級的、文化的使命をもつて居り、その負擔に堪へ得るのである。

### 三

大山氏等の大旋回にたいして、決定的反對の態度をとるにしてもまた豫想に反してその大旋回と共に大旋回するにしても、ナツプの所謂政治的見解は、こゝに新めて外部からも、内部では猶更、批評を蒙らなければならぬであらう。

若しナツプが大山氏等の大旋回に、豫想通り決定的反對を宣明するとすれば、從來の理論の一貫性は、曩にも言つた通り、ともかくも保たれはするけれども、その代りに第一にはこの際明かに、大山氏等の大旋回に、即ち合法性利用にたいして、決定的批判を示さねばならず、それによつて、從來の理論を一層徹底しなければならぬ。第二には特殊的には一つの文學團體が、從來支持して來た政治勢力に、批判的態度をとつて進む場合の種々の問題を具體的に解決しなければならぬ。曩に、『文戰』が舊勞農黨にたいして、批判的態度を明白にして來た時、一文學團體が

文學運動と政治の實踐について



政黨にたいして批判的態度を執ることに關して、批難的批判の加へられたことは、まだわれ／＼の記憶に新しいところである。第三、ナツプの内外にあつて漠然と、少し誇張して言へば、無批判的に、ナツプの政治意見を支持してゐた人々は、この際、ハツキリとナツプの『輝かしい』政治意見を、自らにも、一般にも、知らしめる一種の義務がある。これまでたゞ漠然と『福本イズムは清算された』とか『正しい立場に還つた』とか言はれてゐたことが、單に言葉に過ぎなかつたか、それとも眞實か——それを批判して見る義務がある。尠くとも彼等が、いつまでも一種の追隨者であることを欲しないならば、さうである。

これらのことから、わがマルクス主義文學運動の内部とそのまはりに、再び強い政治的關心がよみがへるならば、これ位歡ばしいことはないと思ふ。と言ふのは、一般には、マルクス主義文學團體は、日一日と政治的聯關を濃厚にして行つてゐるやうに思ひ做されてゐるが、實はさうでない。近來のプロレタリア文學運動の大きな部分は、一種の政治無關心に陥つてゐたからである。たゞ形の上だけで、何等かの政治的勢力と結合してゐるとを以て、自らを満足せさせてゐて、實は甚だしい政治無關心に陥つてゐたからである。事實われ／＼は、いかにも『輝かしい』政治意見を持ち合はせてゐるらしいナツプの人々から、かくて政治意見らしいものを聞いたことがない。



『左翼民主々義者』とか『裏切者』とか言つた類ひの、無数の悪罵と、無数の雑言を聞くに過ぎないのである。さういふことはモウ澤山である。

#### 四

ナツプの人ではないが、近來プロレタリア文學の理論を『展開』させてゐる勝本清一郎氏などにしても、その理論を、當然に、常に政治運動と聯關させて『展開』させてゐながら、私はかつて、氏から政治意見らしいものを示されたことがないのである。氏は、この間『朝日』に書かれた批評家觀のなかで、私を論じた最後に、私の最近を『勞農派の一語につきる』と言つて、そこに一種の非難的意味をふくませてゐる。非難されることは一向構はないが、氏はそれならば『勞農派』の政治的意見を、いつたい理解してゐるのであらうか？ 否、特殊な『勞農派』と言はず、一般に日本のプロレタリア政治運動を理解し、それについて何等か實踐と結びついた政治意見を持つてゐるのであらうか？ それを私は甚だしく疑問にしてゐるのである。

どこであつたか忘れたが、最近活動してゐる批評家として、新居君や平林君や大宅君やいまの勝本氏及び藏原君などの名が、列擧されてあつた、と記憶する。これらの諸君が傳統の意味にお



いて『活動』してゐるとして、これらの諸君は多かれ尠かれプロレタリア的批評家とされてゐる人々であるが、われ／＼はその人々からプロレタリア政治運動にたいする斷えざる關心、それにたいする具體的意見、實踐上の關聯を示されてゐるであらうか？ 新居君や平林君などは、ひと頃は、常にその政治的立場を明かにしてゐたが、今日では、ほとんど意識的に思はれるほど、それを曖昧にしてゐる。さうしてプロレタリア文學批評は、甚だしく政治的實踐と離れてしまつてゐるのである。

かう言ふ状態が、大山氏等の大旋回と、それにたいするナツプの態度から生ずる批評によつて、止められることが出來て、再びプロレタリア文學運動内に強い政治的關心が復活すれば、そこから眞に新しい展開が示されるであらう。

いまわが國の左翼運動は、政治運動の上でも、組合運動の上でもこれまで曾て見ない困難の中におかれてゐる。『行詰り』といふ言葉を用ひれば、左翼勢力のあらゆる分野において『行詰り』が觀られる。この現象の原因を、たゞ支配階級の彈壓の爲めと言つてすましてゐるのは、ごまかしである。こちらの主觀的な過誤も十分に計算に入れて考へなければならぬ。がそれは兎にかくとして、大山氏等のこんかいの大旋回も、その正しいと正しくないのは別問題として、この左翼勢



力の行詰りを打開しようといふ努力の現れには相違ないのである。かう言ふ場合、最も大切なのは漠然と、抽象的に、他のデマゴギーに乗つて、コンミニュニストとか左翼社會民主々義者とか言つた類の概念的の區別立てでごまかしてゐないで、具體的にどういふ政治行動が、コンミニュニストツクであるか、左翼民主々義的であるかを批判することである。

プロレタリア作家、批評家が、いゝ加減な、抽象的な政治的見解を抱いて行動してゐる限り、それは彼等の現實の社會にたいするいゝ加減な見解を反映したものであつて、その藝術と批評は、多かれ尠かれ、抽象的、觀念的、非現實的な缺陷に悩まされざるを得ないのである。しかもこれが、現在のプロレタリア作家、批評家の大部分において眞實にあることを、誰が否定し得よう。

(四年八月)



## 文壇反動の諸形貌

今日は政治的、社會的に言つて文字通りに嵐のやうな反動の時期である。私は、それが具體的な現はれについては、こゝで何一つ指摘することをしないであらう。と言ふのは、それは餘りにも生々しい事實だからである。不斷に血の吹き出すのが見え、骨のひしがれるのが聞えるやうな事實だからである。——いま私が、かう言ふ激しい言葉を使つたからと言つて、それをヂャーナリスチックな言葉だとか、或は尠くとも内容の十分に籠つた言葉でないとか言つた風にとる人があれば、その人は、反動の嵐を直接に受けない人か、乃至はその嵐の吹き荒む滿目蕭條たる社會風景を、日當りのいゝ部屋からガラス越しに展望してゐる人であらう。

たとへ反動の嵐をぢかにその素肌にうけない人でも、ガラス越しにそれを展望してゐる人でも、政治的社會的活動部面で、反動の足音が高く響いてゐること、その反動がどういふ扮装でやつて



來てゐるかといふこと——それを認め、乃至理解することはそう困難ではないであらう。それは厚い鉄板を焼き切るやうな、餘りにも露骨であり、まざ／＼しく物理的だからである。

だが、その政治的、社會的の反動が、文學的の社會に、即ち文壇に、どういふ形態をとつて反映してゐるか、否、そも／＼文壇にその反映があるかどうか、それを認め、乃至理解することは、前の場合に比してよほど困難であらう。文壇は前の活動部面に比すると、ヨリ尠く物理的である。それに文壇にはいろ／＼な人間がある。今日にいたるもなほ、文壇と社會とは「直接」の關聯はない、と考へてゐる火星人さへゐる。また文壇では、萬事がデリケートに運ばれる。反動は必ずしも櫻のステッキを持つて現れないし、悪魔は必ずしもメフィストの扮装をして出て來ない。

それにも拘らず、政治的、社會的の嵐のやうな反動は、文壇のイデオロギーの上に立派に反映してゐる。それを認めることが容易でなく、それを理解することが困難であるにしても、その反映は儼として存してゐる。勿論それは一樣な姿をとつて居らず、一つの運動として現れて居らず、發想に、表現に、多様の現れ方をしてゐるが、とにかく社會的政治的の反動の文壇的反映である點においては、その根柢を同じうしてゐる。

我々の眼前の社會を反動の社會と立派に言ひ得るとすれば、我々の眼前の文壇は反動の文壇で



ある。文壇の進歩的、××的要素たるプロレタリア文學にたいする、或は直接的な、或は迂回的な攻勢の文壇である。

この文壇的反動の具體的發現を一々洗ひ立てるとは容易でない。またその要も必ずしも無い。私はその顯著なるもの、乃至は最もまぎら<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>しい姿をとつて居り、従つて最も欺瞞的なもの、無意識的又は有意識的に最も功妙な構造によつて、その反動的本質を曖昧ならしめてゐるもの、等をこゝに指摘するにとどめる。

二

今日のプロレタリア文學及び文學者には、多くの内在的な矛盾がある。その矛盾の不斷の解決こそが、その文學のそれだけの發達であり、其文學者のそれだけの向上である。プロレタリア文學者のところにおいて、立派に正直にその矛盾が認められ、それが清算乃至克服に、事實額に汗しての努力がなされてゐる時、たゞ單にその矛盾の存在を指摘し、プロレタリア文學者のところにおいてそれを認めないかのやうに假定して非難することは、最も單純な準備の下にされた反動的發想である。



たとへばプロレタリア文學者に内在する心理と意識の矛盾乃至不調和は、誰よりも強く彼等自身が意識してゐる。そうしてそれを正直に告白もし、それが克服に努力もしてゐる。而して「それ（意識と心理の調和）への接近は、目的意識的な作家にあつては常に眼前にある。プロレタリア作家に課せられた問題は、……それ故に、自らの心理を統制し、その藝術を階級的に確められた意識によつて不斷に檢覈することこそ彼の義務であるといふことを、常に念頭に置くことである。」（ア・ゾーニン）——この一般的な心構へは、今やプロレタリア文學者の常識となつてゐる。たゞ問題は、眞にこの場合意義ある問題は、個々のプロレタリア文學者が、それ／＼如何なる正しい、又は誤れる遣り方で、第一、「階級的に確められた意識」を常に把持することに努力しつゝあるか、第二、それによつてその藝術を「不斷に檢覈」しつゝあるかである。

プロレタリア文學のためにこれを問題としないで、多分にチャーナリスチックな心的動機から、その矛盾を單に指摘するに止まることは、その矛盾の指摘にしか興味を持つてゐない實證であつて、明らかに反動的な心理である。而してその効果も確實に反動的である。

故片上伸氏は、曾てプロレタリア文學に内在する心理と意識の矛盾乃至不調和を、見事に指摘した。その指摘は、しかし乍ら、その時期においては決して反動ではなく反動的な効果も持ち得



なかつたといふのは、その指摘はプロレタリア文學者をして尠くともその内在的矛盾を一層明白に意識せしめるに役立つたからである。今日では時期と段階が違つてゐる。この時期とこの段階では、その矛盾の單なる指摘は、プロレタリア文學にたいするその批評家の單なる嫌忌の心理、いぢめ挑む心理の反映に過ぎないのである。

文壇的反動のこの現れは、個人的に色彩づけられて、いろ／＼な表現をとつてゐるが、その反動性を見抜くことは大して困難ではない。と言ふのはその基調をなす心理が、多くの場合、意地の悪い皮肉か、又は聰明ぶつた傍觀的な言葉のうちに、露出してゐるからである。

三

つぎに文壇的反動に最も顯著なもの、したがつてその反動性を觀取するに大して手間のかゝらないものとして、私は躊躇なくかの形式主義文學をあげる。これは一個の文學理論らしいものを構造し、一個の文學運動らしい勢ひにまで達してゐる。だからその反動性を觀取することは決して容易でないと想像されるであらうが、實際はその正反對である。

形式主義文學理論が「やゝもすると文學上の形式を閑却した」プロレタリア文學にたいして、



一つの「貢献」を爲したと、即ち文學における形式の重要性に新らしい注意を喚起したとは、これを認めるだが、かういふ「貢献」ならば一般にプロレタリア運動特にプロレタリア文學は、いかなるブルジョアジイの材料からも、ブルジョアジイの理論からも常に「貢献」されるであらう。形式主義文學理論が、單に、一般文壇及びプロレタリア文學に「忘れられた形式」の再關心を求める理論であれば、その反動性を云々することは馬鹿げてゐるであらう。だが、形式主義文學理論の意圖は、不幸にしてそんなつまましいものではない。彼はプロレタリア文學の内容主義にたいして、形式主義を樹立しようとするのである。社會的鬭争の用具としての藝術にたいして、社會的鬭争から遊離した形式藝術を對置しようとするのである。それが手段として、彼等は曩に内容と感覺とを機械的に分離して、感覺主義を唱道したと同じやり方で、こんどは内容と形式とを機械的に分離して、形式主義を唱道して立ち現れたのである。此機械的分離をそれと知らしめないで仕遂げるために、曩には感覺に、こんどは形式に、いかに凡てのものを詰込んだことであらう。その詰込みの過程——即ち彼等の理論らしいものを解剖することは無駄である。要は彼等の文學理論が、主觀的用意においても、客觀的結果においても、社會的鬭争の用具として充實しつゝあるプロレタリア文學からその鬭争的内容を抜き取るにあるといふ一點である。これは



文壇的反動の顯著なものである。

プロレタリア文學の内容主義文學理論は、今日まだ完成されてゐるとは言へないし、完成を云ふすることすら間違つてゐる。だが、その「弱い内容主義理論」でも、形式至上的文學理論に打勝つだけには十分に強くある。形式主義文學者が反動的役割を演じまいとすれば、この「弱い内容主義理論」を強めるやうな方向に、その文學的形式にたいする特殊の關心を作用させなければならぬであらう。

形式主義文學論は、プロレタリア文學にそれ自身を對置することによつて、反動を實現してゐるのであるが、プロレタリア文學そのものから、その藝術的存在權を抜き取り、乃至奪ふことによつて、即ちプロレタリア文學を内部から片輪にすることによつて、反動を實現しようとする企てがある。この企ては「マルクス主義文學理論の再検討」の美名の下に着手されて居り、一見その文學を前方へ推進するものであるかのやうな外貌をとつてゐるが——その文學的企業家は恐らく、それを前方へ推進しようとの良き意志から、その企てをしてゐるのであらう——事實は、その文學を後方へ引き戻すこと、乃至はそれを不具にすることにしか、結果しないのである。



#### 四

この理論的冒険の筋道は、極單純簡單である。一口に言へば、プロレタリア文學は（作品に於ても批評に於ても）政治的目的が主宰權をもつ文學であつて、「藝術的價值」はそれに從屬するものである。したがつてプロレタリア文學理論は政治理論であつて、藝術理論ではない、と言ふのである。此文學的企業家の心理的準備には、「藝術的藝術」即ち「純藝術」、「藝術的藝術理論」即ち「純藝術理論」と言つたものが、固定してゐることは、何と言つても拒めない。それでなければ、政治的藝術、政治的藝術理論が、そこに對置される譯はない。またプロレタリア文學から、その藝術的存在權を奪はうとする企てが着手される筈はない。

この企ての運ばれる論理的筋道が間違つてゐるかどうか、それはこゝで問題としないにしても、この文學的企業家が「純藝術」の存在を前面に押し出して來て、プロレタリア文學を歴史的、具體的の藝術圏外に放逐したところに、極めて鮮かにその反動性が暴露されてゐる。何故かと言つて、プロレタリア文學が放逐された後、歴史的、具體的の藝術圏内に安置され「純藝術」と崇められるものは、ブルジョア藝術において他にないからである。



若しこの文學的企業家が反動的役割を演じまいとすれば、政治的藝術としてプロレタリア文學を「藝術」から遠ざけると同時に、やはり政治的藝術（作者が意識的であると無意識的であると）はマルクス主義者にとつて、この場合問題でない。としてブルジョア文學を「藝術」から遠ざけ、それによつて逆説的に純藝術の存在を否定し、再びプロレタリア藝術（勿論ブルジョア藝術も）を歴史的、具體的の藝術の座におくことであらう。

この「純藝術」肯定の心理に基づく「再検討」が、いかに本質的に唯心的であるか、従つて反動的であるかは、その理論が「普遍人間性」の理論によつて補足されてゐると云ふ事實で、一層明白にされてゐる。私は、この普遍人間性論の出現——それはブルジョア美學の亡靈の出現である——をもつて、文壇的反動の現れとして、こゝに一先づ指摘しておくことを差控へる譯にはゆかない。

曩の文學企業家の企ては、純藝術乃至純藝術意識を肯定してかゝらねば、たうてい目論まれ得ない企てであることは既に述べたが、そこではその純藝術乃至純藝術意識については、それが餘りに彼のマルクス主義的見せ掛けと矛盾する故にか、一言も觸れられてゐない。だが、その企てを徹底させるためには、どうしてもこの得體の知れないものに手がつけられなければならない。



そこで普遍人間性論が登場したのである。この論の要旨は、これも極く簡單につとめて言ふと、藝術は階級的イデオロギーによりも、普遍人間性に、言ひ換ると「かはらぬ人情」により多く基づくものだ！と言ふのである。我々が耳にたこの出来るくらゐ聞かされて来たこのブルジョア美學の片割れの、内在的、論理的矛盾の解剖はこの機會には差控へる。この議論の論理的な歸結は、藝術はヨリ多く普遍人間性にもとづくものであるが故に、ヨリ多く階級的イデオロギーにもとづくプロレタリア文學は、藝術をヨリ多く離れたもの、乃至ヨリ少く藝術的なものであると言ふことになる。こゝでマルクス主義藝術理論の「再検討」に端を發したプロレタリア文學からの藝術的存在權の剝奪運動は、一とまづ形式上完結した譯であり、其文學上の反動は、こゝで一まづ其理論的徹底を見せた譯である。

## 五

だが分らぬのは、藝術がヨリ多く普遍人間性に基くといふ論據である。なるほど我々は今日、不合理と思ひながらも歌舞伎劇の義理人情の柵にほろりとし、ギリシヤ藝術の美に打たれる。しかし我々は歌舞伎劇の義理人情の柵の表現に、満足するまで泣かされて仕舞ひ、ギリシヤ藝術の



美に全身的に打れてしまふであらうか？　そうでない。我々は我々の義理人情我々の美とするものを、即ち歴史的、現實的の特殊具體的人間性を「かはらぬ人情」でなくて「かはつた人情」を表現しなければ、全身的な満足を覺えない。さればこそ、時代から時代について、常に新らしい藝術が要求され、また生れるのではないか。果してそうだとすると、藝術はヨリ多く特殊具體的人間性にもとづくと言はる可きではないか。そしてその特殊具體的人間性は、時代に制約され、階級に制約された人間性、かはつた人情に外ならないのである。これを要するに普遍人間性論は藝術の持つ一要素の説明にこそなれ、藝術創造の力學の説明には薩張りなつてゐないのである。

藝術價值分離論も、普遍人間性論も、プロレタリア藝術から、その藝術的足場を奪ふことによつて反動を實現するのであるが、それとは全く別個の行き方で、プロレタリア藝術に當爲的な要求を浴せて、その現實の、闘争的意義を抜き取らうとする明らかな反動の現れがある。

たとへばプロレタリア階級は生産階級であるが故に、生産者心理を藝術化しなければならぬとか、又はプロレタリアの社會は機械を土臺とする社會であるから、プロレタリア藝術には機械の持つ様々な性質が反映されなければならぬとか言つた類ひの提論がある。これは當爲的には尤もだと言つてもよいだが、そういう當爲を強調することによつて、多くの場合、プロレタリア文學



の當面の鬭争的意義が、或は閑却されるか、或は意識的に斥けられてゐるのを見るのである。これは確に反動であり、反動的結果を確實に持つてゐる。

プロレタリア藝術はブルジョアジの藝術に對立する新興藝術である。その意味において新興藝術に要求される一切のものは勿論プロレタリア藝術に要求されて差支へない。プロレタリア藝術はそれが負擔に堪へなければならぬ。だが、今日の一般にプロレタリアート、特殊に日本プロレタリアートのおかれた文化的、社會的地位との聯關において、問題を取扱ふ時、そつういふ當爲的な要求を易々として提出し得るであらうか？ 私は否と答へる。たとへば當爲的に見れば、プロレタリア文學における激情的鬭争性の如きは、一個の古臭い文學内容かも知れない。しかし現實の、社會的鬭争の用具としてのプロレタリア文學の意義を飽まで聯關させて取扱ふ時に、それを一個の古臭い文學内容として放擲し得るであらうか？ 私はそつうでないと考へる。反對に、孤立的にプロレタリア文學の當爲を數へ立ててゐるものこそ、プロレタリア文學の力學的前進の道に自ら障礙を與へることを自覺しないものだと思へるのである。

多岐の理論や傾向に觸れて、甚だ輪廓的の説明に終つたが、政治的社會的の反動的嵐が、文壇的にいかなる形貌をとつて反映してゐるか——それについては十分に示唆し得たと思ふ。それら



の理論や傾向の立入つての内在的解剖は、またそれに與へられる機會があるであらう。

(四年五月)



## プロレタリア文學運動の一偏向

この二三年來の日本のプロレタリア文學運動内の、特に目ざましい一つの偏向について、取立てゝこゝに指摘しておくことは、新らしい年を迎へるに際して、決して無駄ではないであらう。否、決定的に必要なことであるかも知れない。

私がいまゝで『特に目ざましい一つの偏向』といふのは、何であるか？ 少しでもプロレタリア文學運動の發展過程に眞摯な關心を持ち、その過程に積極的な働きかけをしてゐる人々——ブルジョア文學批評家的、傍觀者的、印象批評家的の『止り木の異つた』人々で無論無く——は、すぐにもそれと感づくであらう。

外でもない、プロレタリア文學運動内の成る一部、それも表面に泡立つた一部の、小ブルジョア化の偏向である。これを言ひ換へれば、その藝術家行動の小ブルジョア化であり、その藝術的作品の小ブルジョア化である。



わが國のプロレタリア文學の働きかけの方面を、その發達・展開の歴史から考へて見ると、先づ最初の段階においては廣義の文壇的社會を形づくつてゐるところのインテリゲンチヤ——中でも自然發生的なそのイデオロギーが多少プロレタリア化したところの——であつた。而して次の段階においては、意識の若干高められた、本能的に藝術上の關心を持つてゐる勞働者と農民であつた。最初の段階から次の段階への移渡は、相當に長い時日を要し、落付いた努力がそこに必要であつた。だが、とにかくその移渡が、確實に行はれたことは疑ひない。

プロレタリア文學運動が、最初の段階において、文壇的社會を形づくるインテリゲンチヤに、その働きかけの範圍を求めたのは、その藝術的存在權の獲得上、必然なことであり、また必要なことでもあつた。

プロレタリア文學運動が、次の段階において、その働きかけの範圍を勞働者農民の上にひろげて行つたことは、その運動の本來の使命上、これも必然なことであり、また最も決定的に必要なことであつた。

この働きかけの方面における發展の對應は、これをプロレタリア文學作者の方向にも觀て取ることが出来る。最初の段階におけるプロレタリア文學者は、その殆んど全部、イデオロギーにお



いてプロレタリア化したインテリゲンチヤか、乃至はその心構へにおいてすでに文壇的インゲリゲンチヤ化してゐた労働者農民であつた。次の段階においては、これらのものゝ中へ、力強く、勇ましく、労働者農民の作者が歩み進んで來た。

觀方を轉換すれば、勿論、プロレタリア文學の作者の側における、この本質的な發展であつて、初めて第二の段階への移渡が可能だつたと言へるのである。

ところが、この二三年來、プロレタリア文學運動の内部に、その意識的な働きかけの方面において、その個々の作者の努力の方向において、一つの後退が示されて來た。(それは後退でもあればまた、一つの偏向でもある。)それは再び、その働きかける範圍を、文壇的社會をかたちづくるインテリゲンチヤに求めんとする後退乃至偏向であり、その努力の方向を文壇的社會のサルーン的喝采に求めやうとする偏向である。明らかに小ブルジョア的の偏向である。

而して主として(全部的ではなく)この偏向をとつた部分は、インテリゲンチヤ的教養と生活の深く浸透した頭腦と肉體をもつて、プロレタリア文學運動に加つて來た要素である。かの世にマルクス・ボーイと冷笑される一種のモダン・ボーイは、その要素中の最も滑稽な、或はまた最も悲惨な若き存在である。



然らばこの小ブルジョア化は、いつたい何處から來たのであらうか？

根本的には、これらの人的要素に内在するところの、小ブルジョア性から來たのである。プロレタリア運動を、階級運動として、實踐において、全體的に高めて行くことよりも、ヨリ多く自己満足のために、自己慰撫のために、プロレタリア運動に分け入つて來たところの彼等の小ブルジョア性から、またプロレタリア文學運動を、階級運動の不可分の一部として階級運動全體との關聯において高めて行くことよりも、ヨリ多く文壇的自己満足のために、藝術的自己陶醉のために、プロレタリア文學運動に分け入つて來たところの彼等の小ブルジョア性から、來たのである。何故彼等は、プロレタリア運動なり、プロレタリア文學運動なりへ、分け入つたのであるか？

これには社會的な根本理由がある。それは、改めて問ふまでもないであらう。

それならば次に何故彼等の小ブルジョア性が、特にこの二三年來、清算されずに、反つて發揚されたのであるか？ それには文壇的、社會的にさまざまの力が作用してゐるであらう。

だが、直接にイデオロギーの上で、その小ブルジョア化に目ざましい力のあつたものは、いまは一種の通語になつてゐる『福本イズムの毒杯』である。

『福本イズムの毒杯』が、『小ブルジョア性の毒杯』に外ならなかつた事實は、今日となつては、



最早これを實證するにすら値しない。何故と言つて、當時その毒杯に最も陶醉してゐた人々すらが、それが小ブルジョア性の毒杯たることを認めており——もつとも彼等が、この毒杯の宿醉から、現在完全に醒めてゐるや否やは、全く別問題である。泥酔者ですら、俺は酔つてゐない、と言ふのが普通だから——他に向つて己れの鼻腔と口腔とを一杯にひろげて、それが清算を要求してゐるからである。

否それに優つて、日本のプロレタリア運動の動かす可からざる實踐は、福本イズムの高級定理『結合の前の分離』の理論が、一人のドンキホーテ的小ブルジョア・インテリゲンチヤの理論的自己満足の所産に外ならないことを、萬人の肉眼に、かの曩にその定理を神符として崇めた人々の肉眼にすら、叩き込んだからである。

この福本イズムの毒杯が、いかに直接にプロレタリア文學運動内の小ブルジョア化に作用したかは、仔細の穿鑿を待つまでもなく、その運動内の、めざましい過去の歴史が證明してゐる。

福本イズムの毒杯が、最もその毒液を流し出してゐた時、而してこの毒液の魔の匂ひを發散させてゐない人はマルクス主義者に非らずと云はれた時、即一九二六年には、それに對應して、プロレタリア文學運動内部に、即ちその實質主體たる『文藝戦線』に、第一回の分裂が起つた。即



ちプロレタリア運動における小ブルジョア化——福本イズムの猖獗——に對應して、プロレタリア文學運動の内部に、最初に小ブルジョア化の目ざましい發現があつたのである。

その毒杯がまだ渴かず、それが陶醉者の亂舞が最頂點に達した時、即ち一九二七年には、それに對應して、同じくプロレタリア文學運動の主體に、第二回の分裂が起つた。即ちプロレタリア運動における小ブルジョア化の最頂點期において、それに對應してプロレタリア文學運動内に小ブルジョア化の、これも目ざましい發展があつたのである。

この二度の分離者が、二度に分れて分離しては行つたが、同質の存在であることは、その後間もなく、福本君の用語例をかりれば、ずるくべつたりに結合して仕舞つたのでも分る。

わがプロレタリア文學運動における小ブルジョア化——偏向は、かくして發生し、かくして發展したのであるが、それは現在どんな姿をとつて來てゐるか？

概く卑近な一例をあげて、このスケッチをおしまいにする。極めて機械的な、プロレタリア文學の『大衆化』（實は文壇的社會での大衆化）論と、それに對立する、極めて觀念的な、プロレタリア文學の『藝術化』論とが、その小ブルジョア的偏向の最近の發現形態である。言葉を換へて言へば、彼等のところの一種の藝術至上精神の發揮が、その小ブルジョア化の最近の發現形態で



ある。

プロレタリア文學運動内のこの小ブルジョアの偏向は勿論、プロレタリア運動内の小ブルジョアの偏向に對應するものである。それはかの合法政黨無用論に現はれた、大衆からの完全な孤立主義、自然發生的欲求の自己満足主義、××的ロマンチズム乃至センチメンタリズムの偏向である。

この一般にプロレタリア運動内、特殊にプロレタリア文學運動内の、小ブルジョア化、乃至小ブルジョア××主義化にたいして、反抗し、闘争する力は過去においても根強く存在してゐたし、現在においても力強く發現してゐる。

だが、その小ブルジョア化、小ブルジョア××主義化は、容易にこれを克服し切り得るものでなく、それは種々様々に變貌し、變態して存在しつゞけ、或は發展する場合すらあるであらう。特に文藝運動の方面は、その運動の特殊性の故に、それが永く住みながら得る避難所である。(アナキストの残された住み家が、今日、文學團體である事實を見よ。)それだけに、この方面でのこの偏向にたいする闘争は、根強く、執拗に戦はねばならない。(三年十二月)



## 藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相

一

讀者諸君！ 勞農藝術家聯盟の最近の分裂、乃至は一部の會員の逃亡については、聯盟の聲明書及び前月號本誌の小堀甚二君の事實報告によつて、諸君は十分にその真相と意義とを知られたことと思ふ。而して逃亡者等のあらゆる中傷と、讒誣と、惡罵と、而して明白な泣事とに拘らず、事實はやはり炳乎として事實であつて、その中傷と、讒誣と、惡罵と、而して明白な泣事とは、單に事實の光をして一層光あらしめるものに過ぎないこと、これも亦その後の經過によつて、諸君のまへに明らかになることと思ふ。

私はここに、多少の重複をも顧みず、逃亡者等のイデオロギー及びそれに基く行動の發現の諸相を指摘し、それを一々事實について説明し、兼ねて彼等のその後の言動の實質を曝露しておかろと思ふ。と言ふのは、そうすることによつて、この『分裂』の意義を一層明らかにし、諸君の



理解と支持との徹底を求むることが出来るかと考へるからである。

讀者諸君は既に、右の聲明書と、報告と、而して前號本誌の猪俣津南雄君のコミンテルンのテーゼに關する説明とによつて、今回の逃亡者が、その本質において、テーゼの謂ゆる宗派的分裂主義の文藝運動における現はれであること、その意味において、彼等と、曩に分裂結成した日本プロレタリア藝術聯盟の指導者とは同質のものに外ならないことを知られたであらう。そこで、こゝに今回の逃亡者等の觀念及び行動の發現諸相を指摘することは、即ち日本の藝術運動における宗派的分裂主義者の觀念及び行動の發現諸相を指摘することを意味し、またそれによつて逆に彼等が宗派的分裂主義者以外の何物でもないことを曝露することを意味する。従つて今回の逃亡者等とプロ藝の指導者を切離して取扱はず、それを一體とし、分裂時のプロ藝指導者の行動をも必要に應じて引例して行くであらう。

## 二

彼等はその本質において、宗派的分裂主義者であるが故、運動の諸形態がことごとくその宗派的觀念によつて浸透されてゐなければ承知しない。その構成員がことごとく宗派的分裂主義者で

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相



なければ、それはマルクス主義的運動形態でないと觀念する。この誤謬は、政治運動の方面では、曩に労働農民黨を共產黨と誤認し、結黨約二年後において何に驚いてか、勞農黨の本質規定などと言つて狼狽した誤謬の、文藝運動における現はれである。また組合運動の方面では、曩に労働組合を××的前衛の教育所と誤認し、後にあゝたいしくも、日常經濟闘争の大衆的組織としての組合の意義に目醒めて來た（一九二七年になつて！）誤謬の、文藝運動における現はれである。これを要約すれば、大衆政黨をして左翼政黨たらしめ大衆組合をして左翼組合たらしめ、かくて左翼の組織をその中へ溶け込ますことによつて、大衆との眞のつながりを失ふことに結果する清算派的誤謬の、文藝運動における現はれに外ならないのである。

曩にプロ藝の指導者等は、日本におけるマルクス主義藝術運動の主體は、プロ藝あるのみであるから、『文藝戦線』同人を解體し、その機關紙をプロ藝に引渡せと主張した。かく彼等にとつては、『マルクスの思考する個人』の純粹な集りでなければ運動形態ではないのである。過去十年の闘争の歴史を有し、約二萬の讀者大衆を背後に持つ『文藝戦線』と、闘争上の強固な結合をつくり統一戦線を張ることの必要よりも、彼等の宗派的結合の方が大切だつたのである。次いで彼等は『文藝戦線』の指導者はプロ藝に服従しないと云ふ理由、分裂によつて對立が一層明白にな



ると言ふ理由、而して唯それだけの理由によつて取急いで形の上の對立を敢てしたのであつた。即ち彼等にとつては、唯單に對立すること、手つ取り早く分裂することのみが問題であつて、『文線』の讀者大衆といかにして連絡するか、それを如何にして統一戦線に動員するかは、全然問題ではなかつたのである。これがコミンタンの指摘した宗派的分裂主義でなくて何であらう。

今回の逃亡者等の行動は如何。小堀君の報告にもあるやうに、山川氏の論文が擴大執行委員會において、これに對する反對論文も掲載すること、かくて誌上において討論を行つた結果、漸次に聯盟の政治意見の統一を圖ることといふ條件の下に、その掲載方が可決されて後、彼等はいかなる行動をとつたであらうか？ 彼等は、數日後の文學部會を反對派に無通知で、一端擴大執行委員會を通過した右論文の再審査會となし、反對派即ち我々がその掲載方を固守すれば、一舉に多數の力によつてその掲載中止を決定し、場合によつては我々を除名し、分裂を執行しようとした。だが、山川氏の一隨筆的論文の掲載を固守して分裂の危機を深めることは、我々にとつては餘りに大きな苦痛であつた。我々は現在いかなる場合にも分裂政策に結果する行動をとつてはならない。そこで我々は自發的に右論文の掲載方を撤回し、政治的意見の統一はこれを聯盟内部の研究及び活動を通じて圖ることを提議した。この提議も可決され、且つ數日後の總會に再びこの問題



があわたいしくも問題とされ、混亂次いでは分裂を來たさない爲めに、この夜の會を臨時總會に直して、この夜の一切の決定を正式の總會の決定とすることとしたのである。これで分裂の危機はこれを防ぐことが出來た。これからはこの夜の申合せに従つて、聯盟内部の漸次的な解決に委せられたのである。然るに數日後の定期總會において、逃亡者等は、再び『政治意見統一の件』なる議案を提出した。政治意見統一の具體的方法までが、數日前の臨時總會で可決されてあるのに、何故に數日後の總會にこの議案を提出せねばならぬのであるか？ 提案者林房雄の説明によると、聯盟内に政治意見の不統一があつては聯盟の活動に支障が生ずるから、これが統一を圖る必要があると言ふのである。即ち彼等は數日前の申合せを無視し、一夜の中に（！）政治意見の統一を圖り、且つ勞農藝術家聯盟を、彼等の單一な政治意見——宗派的分裂主義の……による結合體としようとして圖つたのである。而してかく手を代へ品を代へて、不可能を可能とせんとする努力が客觀的に如何なる結果を招來するか、それは遂に彼等の意に介せざるところ（マルクス主義者が！）である。彼等にとつては聯盟の勢力の分散を防ぎ、聯盟の背後にある勢力を無産階級運動の統一戦線に動員することなどは、微塵も問題でなく、彼等の宗派的分裂主義の意慾と遊戯心を満足させればいゝのである。かくて總會において、その宗派的分裂主義の意慾と遊戯心を満足



させ出来なかつた彼等は、その數日後に、奇異なる逃亡を敢てして、始めて、眞に始めて、その意欲と遊戯心とを満足したのである。

この行動の全過程に、讀者諸君は何を見てとるか？ それは藝術運動の大衆組織を、×××の組織のごとく錯覺した清算派的誤謬と、宗教派分裂主義の實踐以外の何ものでもないのである。

### 三

これに關聯して逃亡後における彼等の言動の實質を曝露して、宗派的分裂主義の別個の發現形態を示さう。

逃亡後彼等によつて發表された逃亡理由の聲明書の内容には、實にたゞ二つの具體的な主張（！）しか含まれてゐない。一、残留者は暴力を用ひて威嚇したが故に、二、一刻も長く止まれば止まるほど、意識の低い自己の支持者を奪はれる危険があるが故に。（何と言ふ自信のないマルクス主義者であらう！）これだけである。尠くとも具體的な理由としてはこれだけである。折衷主義云々、その隱謀云々については、逃亡者等は遂にその具體的内容を示さない。何が折衷主義であるか？ 嘗て彼等の一人は答へた。世間に定評があるからと。これが彼等の有する唯一の説



明であり、その聲明書に明記されてない説明である。而して彼等の言ふ世間とは、空間的にも時間的にも宗派的分裂主義者の小集團を範圍とせる世間であることは、その範圍以外に眼界の及ばない彼等には、氣つく由もないのである。具體的説明を與へ得ない現由は、理由でも何でもなく譎語である。そこで逃亡者等の理由中の理由らしきものは右の二點に盡きるのである。

今回の『分裂』を中心として、少數派としての我々の側が、彼等の犯罪心理的誇張は問題外として、多少の暴力的行爲をとつたことは、これを認める。だが、彼等は常にものをその聯關性において、全體的に觀るところの、辯證法的思考方法をとると揚言してゐる。然らば今回我々の側の多少の暴力的行爲は、何に聯關し、全體的に何を意味するか？ 事實について觀よう。多少の暴力的行爲が執られたのは、何を契機としてあるか？ 逃亡者等が山川氏の論文を有耶無耶に葬らうとした時期にも、まだその事はなかつた。彼等が我々に無通知で文學部會を右論文の審査會に變更し、多數をもつて一舉に事を決し、場合によつては或々を除名しようとした時期、而して我々が分裂を防止するために、右論文を自發的に撤回した際にも、まだその事はなかつた。而して、その數日後、再び總會の席上において彼等によつて前記の事實上分裂を策した提案がなされ、彼等の意圖が全く分裂政策にあると知れられた時、實にその時、始めて少數派としての我々



の側において、多少の暴力的行爲が用ひられたのである。我々はたゞ黙々として無抵抗に彼等の躍氣的分裂政策の犠牲となり、約十年の光輝ある發表機關と、その背後の二萬の讀者大衆とを捨て去ることが、決して戰鬪的マルクス主義者の自信ある行動でないと信じたからである。

逃亡者等にして暴力行動を云々するならば、何故に、僅か數日間（！）における、彼等の側の手を代へ品を代へての躍氣的分裂政策との聯關において、全體的に取扱はないのであるか？ そのことの自分等にとつての不利を本能的に直覺し、暴力行爲だけを切離して、ファスシスト化を云々するのは、惡戯小僧が本能的に自分の惡戯を棚に上げて、隣の少年の暴力行爲を大聲立てゝわめき立てるのと同じの心理である。云ふまでもなく小兒病的心理である。もし右の契機と聯關において多少の暴力を用ひたことが、直ちにファスシスト化（何と言ふ手つ取り早さであるか。この手つとり早さによつて、今回勞農黨があわたくしく合同を申込んだ日勞黨も、社會民衆黨も、曾て宗派的分裂主義者によつて、ファスシスト黨の烙印を押された！）の實證であるならば、凡そ戰鬪的な日本の勞働組合、否、世界の戰鬪的社會主義團體にして、曾て或る契機と或る聯關において、ファスシスト團體でなかつたものはないであらう。

逃亡者等はまた特に、林、山田、大河内三君に對する我々の側からの暴力行爲を、ヒステリー



的の狂噪をもつてわめき立てゝゐる。こゝでもまた我々は、彼等の犯罪心理的誇張は問題外として、三君にたいして多少の暴力的行爲のあつたことを正直に認める。だが、その暴力的行爲も何に聯關してゝあるか？ 先づそれが、彼等の一切を放擲しての逃亡直後であつたことを記憶しなければならぬ。而して林房雄君にたいするそれは、一日一瞬時の中に言を左右にし、行動を表裏した同君の態度（林君はこの事實を否定しないであらう。而して具體的な政治意見がなく、それかと言つて他に飽まで盲目的に追隨するにしては、多少の聰明さをもつてゐる同君としては寧ろそれが正直な舉措であると我々の側で註釋したことを、記憶してゐるであらう。）と切離しては全然解されぬものである。次に山田、大河内君にたいするそれは、彼等が逃亡に際して、重要な聯盟の事務の引きつぎを爲さず、彼は野となれ山となれ式の行動を執つたことに聯關してゐる。山田君は『文藝戦線』の會計事務一切の引繼をなさず、大河内君は聯盟本部の會計事務一切の引繼ぎを爲さずして、逃亡し且つ何時引繼ぐ可しとも通告しなかつたのである。これらの行爲との聯關において、右の多少の暴力的行爲を觀察したならば、如何なる解釋が下されるであらうか？ 彼等の好むがまゝにものを手取り早く片附けるとして、我々の側がその多少の暴力的行爲によつて、果してファシストの本性を現はしたものであるならば、一切の帳簿及び合計の携帶逃亡に



よつて、彼等は何ものゝ本性を現はしたものであらうか？ 戦闘的マルクス主義者のか？ それともまた單なる破廉恥者のか？

この全體によつて示されることは、彼等の眼には、半日前までその根據としたところの勞農藝術家聯盟と、『文藝戦線』背後の讀者大衆とは、微塵も問題ではないのである。問題はたゞ彼等の單一純粹なかたまりである！ この唯一無上の問題の解決される見込がない以上、彼等にとつて聯盟と『文線』の讀者大衆とは無用の長物である。そこで彼等は荷物をまとめ、事務も會計も蹂躪して逃亡したままである。

これで果して、『全階級的政治闘争意識』に『浸透』された『前衛藝術家』と言ひ得るかどうか？ 宗派的分裂主義者で無いと言ひ得るかどうか？

#### 四

逃亡者等のその後の聲明書中の、多少とも具體的な内容をもつた理由の他の一つは、曩にも言つた通り、聯盟内に一刻も長く止れば止まるほど、彼等の支持者たる會員を奪はれる危険がある。だから一先づ取急いで全員をまとめて脱退——逃亡してその危険を脱出すると言ふ理由であつ



た。これを讀んだ時に私は、曩にプロ藝との分裂の際、プロ藝の有力な指導者の一人の言として、曾て佐々木孝丸君によつて傳へられた事を想ひ出さざるを得なかつた。曰く、いまプロ藝が『文藝戦線』のふるつはものと一緒にあれば、ふるつはものために支配される危険があると。この言と今回の逃亡者の逃亡理由の一つとを照合すれば、まことに符節を合してゐる。この一些事もつてしても、プロ藝の指導者と、今回の逃亡者等とがいかに同質的存在であるかに、可成りの喜劇味を帯びて、讀者諸君に想到されるであらう。

それはそれとして、『戰鬪的マルクス主義者』のこの恐怖病（何と言ふ矛盾であらう？）は、政治運動の方面においては、無條件合同論にたいする宗派分裂主義者のつい先頃までの態度（この態度は現在も姿をかへて保存されてゐる。）に明白に現はれてゐる。彼等に従へば、勞農日勞の兩黨がそつくりそのまま、例へば分裂前の綱領の下に合同すると假定すれば、勞農黨に結晶したマルクス主義指導精神は、遂に無慘にも、日勞黨の組合主義的指導精神のために克服されなければならぬ、それが必然の運命である！ だからあらゆる代價を支拂つても、現在の分裂對立の状態を維持し、勞農黨が日勞黨の右翼組合主義精神に克服されることを防がねばならぬ、と言ふのであつて、勞働者及び農民の間にのみ、勞働者及び農民の大衆の中へ入つて行つてのみ、その決定



的勝利が保證されるところの戦闘的マルクス主義的精神が、労働者及び農民を背景に有する大衆黨と結びつくことによつて、組合主義的精神のために克服されるとは、まことに戦闘的マルクス主義精神と、『全無産階級政治闘争意識の浸透』との、名譽のために遺憾千萬である。だが、この恐怖病の病源は、彼等の戦闘的マルクス主義精神が實は宗派的分裂主義者の精神であり、彼等の『全無産階級政治闘争意識の浸透』が實は『清算派的政治闘争意識の浸透』であることを知るに及んで、直に白日の下に曝されるのである。

藝術運動における右の恐怖病は、言ふまでもなく政治運動における恐怖病の傳染したものに外ならない。『文藝戦線』と一緒におれば、戦闘的マルクス主義が、相手の折衷主義に克服される！一刻も長く止まれば止まるほど、前衛藝術家的精神（？）が、反動藝術家精神（！）のために戦ひとられる！だから現在分裂を策さねばならぬ。だから一先づ荷物をまとめて、手ぎれいに逃亡せねばならぬ。——多くの場合、本質は同質的であつても現象態様は甚だしく異なるものであるが、これはまた、何たる足の爪先までの一致符合であることか。

然らば彼等がその恐怖病の故に、取急いで取まとめて行つた人的要素は何であるか？ プロ藝の場合にも、こんどの逃亡者の場合にも、『まだ意識水準の低い』演劇部の青少年である。彼等は、



これらの意識水準の低い青少年を、彼等の指導精神と、反対派の指導精神との同一組織内において、闘争の過程において、その闘争による教育の實踐において、戦ひとらうとはしないで、それを闘争から隔離して、彼等の温室で育てやうとする。恰かも宗教的教育が、俗世と隔離した伽藍又は禪堂で青少年僧を教育するのと同然である。

かくして彼等にとつては、これらの意識水準の低いノヴィス等を、眞に大衆組織の内部において實際の闘争を通じて教育することが問題ではなくて、それを自分の手元に、即ち自己の宗派に引きつけることが問題なのである。それがためには分裂もまた止むを得ない。且つその意識水準の低い一群のノヴィス等さへ彼等の法衣の下に無事に保護し得れば、聯盟及び『文線』背後の大衆などのやうな、目に見えないもの（！）はどうしてもよいのである。こゝに彼等宗派的分裂主義者の、その本質が宗派的なるが故に生ずる、デマゴグ的な行動がある。デマゴグとは他を率ゆるがためには、いかなる欺瞞的な手段も之を辭せない種類の人間の謂ひである。デマゴグにとつては、その率ゆる人々の教育や、その人々の前に展開さるべき闘争の實質などは最初から問題でなく、たゞその人々を率ひて、自己の道具とさへすればよいのである。かくして彼の行動の基準が宗派的であればあるほど、彼のとる行動はデマゴグのそれとなつて現はれる。



讀者諸君、我々よりの克服を恐れて、あわたどしくも意識水準の低い青少年をとりまとめ、安全地帯に逃亡した彼等と、同一組織内にあつて、ブルジョアジーとの闘争の過程のうちにおいて、彼等の意識水準を高めて行かうとした、我々との何れが、果してヨリ多くデマゴグであり、果してヨリ多く戰鬥的マルクス主義者であらうか？

## 五

今回の逃亡者等及びプロ藝指導者の宗派的分裂主義は、偏政治主義乃至は政治（云ふまでもなく宗派的、清算派的政治）への盲目的追隨主義となつて現はれてゐる。

讀者諸君は勞農藝術家聯盟が、その創立にあたつて、左翼小兒病者及び理論拘泥主義の排撃を宣言すると共に、それと重ねて、『勞働農民黨』及び『無産者新聞』の支持を宣傳したことを鮮やかに記憶して居られるであらう。この消極及び積極の二つの宣言は、決して是を切離すことが出來ないものである。もし是を切離して取扱ふならば、プロ藝との分裂、聯明創立の意義が爲めに甚しく稀薄とならざるを得ないのである。我々はプロ藝と同じく、『勞働農民黨』及び『無産者新聞』を支持する。だが我々はプロ藝と自らを區別して、それと重ねて、左翼小兒病者及び理論拘



泥主義者を排撃すると宣言したのである。

だからプロ藝の實踐が、『労働農民黨』及び『無産者新聞』にたいする盲目的、無批判的支持に墮する傾きがあつたとしてもそれは別に不思議とするに足らないが、勞藝の實踐は、絶対に、即ちその宣言の一半を無視することなくして、それらにたいする盲目的、無批判的な支持を許さぬ約束の下におかれてある。我々は『労働農民黨』及び『無産者新聞』を支持するが、若しその全部乃至一部に、左翼小兒病及び理論拘泥主義があつたならば、斷乎としてそれと戦はなければならぬ。宣言は我々にそう命ずる。爾く我々の支持は、盲目的、無批判的であり得ないのである。かくして政治的に言つてプロ藝との分裂の意義があり、眞のマルクス主義藝術團體としての勞農藝術家聯盟の創立の意義がある。

然るに今回の逃亡者等は、どうであつたらうか？ 『労働農民黨』の主として書記局に、而して『無産者新聞』の編輯局に、明らかに左翼小兒病的要素の結集と、その理論拘泥主義の現れとがあるに拘らず、そしてまた、多かれ少かれ彼等もそれを認めてゐたに拘らず、斷乎としてそれと戦ふことをせず、それに盲目的に追隨し、無批判的に奉仕すること、プロ藝と何等選ぶところがないのである。



これの最もよく現はれたものは、(一) 山川氏の論文にたいする彼等の態度と、(二) 僅々數日の中に注入された彼等の政治意見の正體と、(三) マルクス主義政治運動にたいする彼等の傍觀者的態度である。

(一) 山川氏の論文は曩にも説明した通り、擴大執行委員會において、條件を附して、これを採用した。その席上では彼等は、この論文が神聖不可侵なる『無産者新聞』の言説を駁撃し、無上存在たる『労働農民黨』の政策を攻撃してあると言ふ理由で、一應その採用を嫌忌したのであつたが、反對意見も盛んに掲載して研究することゝ云ふ條件の正當を認め、且つ自分等には具體的な政治知識と、それに基づく政治意見がないので困る(然るに見よ、數日の後には彼等は、分裂を賭してまで擁護せねばならぬ政治知識と、それに基づく政治意見が、どこからか注入されたのである!) いかにか輕便にして、いかにか無性格であることよ!) といふ正直な自己告白の下に、その採用を承認したのであつた。が、これも曩に述べた通りに、その數日後になつて彼等は反對派に無通知の審査會まで開いて、この論文を撤回させようとした。この數日の間に彼等の伺候してその宣下を求めたものは、彼等の洩してゐる通り、また彼等の行動の示す通り、『無産者新聞』の編輯局と、『労働農民黨』の書記局であつた。『無産者新聞』のマルクス主義よりの偏向を指摘し、

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相



書記局の欺瞞的な政策を曝露した山川氏の論文の採否を、その編輯局とその書記局に乞ふて決定する！ 勞藝創立の精神たる左翼小兒病の排撃は、何處の世界へ消散したのであるか？ 意識的、批判的な『支持』の基準は、何者のために奪はれたのであるか？ これが宗派的分裂主義の精神、宗派的信仰への没入でなくて何であらう。

(二) 彼等が僅か數日にして戦ひとつた政治知識、政治的意見なるものの中樞は、然らば何であるか？ 彼等は日本の左翼の主體が一本の線を引いてゐて、その線上に『無産者新聞』と『書記局』が貫かれてゐると言ふ夢のやうな——然り、それが左翼の主體であるとすれば、よし現實にあつたとしても、その價值は夢の價值と等しい——知識を、何處からか注入されて來て、勞藝もやはりそれらと同じくその線によつて貫ぬかれねばならぬと説き出した。而して彼等にとつては、その左翼の謂ゆる主體なるものが、大衆と如何なる關係におかれてあるものであるか、その關係の實質においてのみ、それが眞に左翼の主體たる性質を具備するものなること等、等の問題は、遂に問題となり得ないのである。數日にして注入された知識は、結局において數日に注入された知識にすぎない。彼等は、その最速成の知識によつて、合法的大衆組織の藝術團體を×××と同質のものと解する、曩に説いた彼等の誤認を一層深め、分裂への多少の自己辯護をそこに見



出したのである。

こゝにも亦、勞藝の創立の精神が、廢物になつたかつらや衣裳と共に、物置の一隅に放棄されてしまつた！

(三二) 彼等と雖も、具體的な問題について一問一答する時、『無産者新聞』の編輯局や、勞農黨書記局の過誤を、多かれ少かれ認める！ 彼等としてはまことに殊勝である。だが、その殊勝な多少の批判性がすぐ後に、然らばそれに對していかなる態度をとるか？ といふ問題において、どう發現するか。曰く、多少の過誤は認める、だが、その過誤を彼等自ら(編輯局や書記局及びそれを貫いてゐる宗派的分裂主義的主體)清算し、自己治療をやつてゐる時に、ハタ(この用語に注意せよ!)から批判し、攻撃するのは差控ふべきであると。その人々が果して本統に清算しつゝあるか、自己治療にとりかゝつてゐるか(最近の、あはたゞしい欺瞞的な合同提議はその虚妄であることを實證してゐる!)それは別問題として、いま假りにそれが事實であるとしても、何故、ハタからそれを批判し指摘して、その自己清算の過程を急速完全ならしめてはいけないのであるか? 無産階級運動は宗派的分裂主義者の獨占物でもなければ、マルクス主義政治運動は、彼等に委しておいてハタから觀てゐてよいものでもない。我々と我々の團體とは、彼等と等しく

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相



全體としての無産階級運動を構成する一部である。また我々と我々の團體とは藝術を武器として、マルクス主義政治運動の一翼として積極的にそれに結付いたものである。我々にとっては宗派的分裂主義者の保全が問題であるよりも、ヨリ多く日本におけるマルクス主義政治運動の保全が問題である。彼等が果して自己清算の途上にあらうとあるまいと、彼等の誤謬を指摘し、その過誤を曝露することは運動の傍觀者でもなく、道連れでもない我々の當然なすべき任務である。曩にも言つた通り若し果して彼等が自己清算の途上にあるならば、彼等の誤謬と過誤にたいする批判及び曝露は、その自己の清算の過程を速急完全ならしめる利益がある。而してそれによつて無産階級運動が失ふものは微塵もないのである。逃亡者等がハタからの批判を云々することは、最も明白に、彼等がマルクス主義藝術運動がその一翼を受持つてゐるところの、マルクス主義政治運動にたいして、傍觀者の態度をとつてゐることを曝露してゐる。且つまたそのことは、政治運動における宗派的分裂主義者にたいして、盲目的、追隨的な態度をとつてゐることを曝露し、兼ねて彼等自身が宗派的分裂主義者のエビゴーンに過ぎないことを曝露してゐる。



私は今回の逃亡者等及びプロ藝指導者の政治運動にたいする行動を観察する時、過去約十年の日本のプロレタリア藝術運動の途上に現はれた現象を想起しないではおれない。

元來、左翼小兒病的存在とその見解とは、今日の條件の下では宗派的分裂主義者とその見解となつて顯現してゐるが、それは何もいまにして初めて現はれた存在物乃至傾向ではない。早くから運動の内部に、或は特殊集團とその見解の形態をとつて或は諸ろの團體及び思想に混入して存在したものである。

その存在の、藝術運動に對する見解は過去と今日とで、兩極的の對立を示してゐる。日本にプロレタリア藝術運動が初めて發生した當時、及びその後の相當に長い時期の間、彼等は藝術運動にたいして極端に否定的の態度を執つたのであつた。或者は藝術運動はプロレタリア解放運動の一部であり得ないとまで極言したのを、私は明確に記憶してゐる。當時、ブルジョアジの文壇は、プロレタリア運動内部からのこの否定の言葉を借用して、我々を攻撃し來り、芽生えの中にこの運動を刈り取らうとした。我々は一方にブルジョアジーと、他方にプロレタリア運動の内部からと、兩面に敵を受けて苦闘したのを覚えてゐる。

當時アナキスト及びサンデカリストの藝術運動家は、明白に政治否定、政治運動否認を主張

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相



してゐたので、彼等にとつて政治運動と藝術運動との辯證的統一などは元より問題ではなかつた。が、専ら當時『種蒔く人』（今日の『文藝戦線』の前身）に結集してゐたマルクス主義の藝術家は、實踐上における政治運動と藝術運動との辯證的統一の意志と、それに基く行動とを止めたことはなかつた。それが爲め會て新らしい、政治闘争の一翼を形ちづくるために、大衆的な藝術家團隊を組織しやうとして、當時まだ活動力の旺盛であつたアナキスト及びサンデカリストと大論争を惹起したことさへあつた程である。かくの如く、日本のマルクス主義藝術運動は、最初から、一方に小兒病者の見解を排斥し、謂ゆる實際運動者を批判し、また實際運動からも批判されて、その相互影響の下に發育して來たのである。

この當時マルクス主義的藝術運動の意識を或程度までハツキリと把握してゐなかつた人々が、謂ゆる實際運動者の方面その中で主として小兒病者の批判と攻撃とを盲目的、追隨的に受け入れて、藝術運動に多少の適性と興味を持つてゐたに拘らず、運動から去つて行つたのを記憶してゐる。即ち彼の思考内容には、無批判的な追隨的な方法があるのみで、辯證的な方法は無く、従つて一見矛盾對立した政治と藝術との統一などは、夢にも想ひ及ばなかつたのである。その意味において彼等も亦、藝術運動内における小兒病者だつたのである。



然るに無産階級運動の發展、及びプロレタリア藝術運動の進出は、漸次にその間の相互關係を深めて行き、その結果、從來プロレタリア藝術運動の意義を否認し、乃至は輕視してゐた部分までが、進んでそれを認めるやうになつて來たことは、詳しく説明するまでもなく最早明らかなきことであらうと思ふ。だが、その方面での藝術運動にたいする認め方はまだ全面的なものでなく、せいぜいのところで彼等の想推した範圍での、即刻實利的な一面だけである。これはよく記憶しておかねばならぬ。とにかくそう云ふ具合にして藝術運動の意義が、同じ陣營の他の部分からも認められるに到つた。

するとどうであらう！ プロレタリア藝術運動の可成り廣汎な部分が、大波の如く盲目的、機械的、無批判的に、それに追隨して、その認められた一面性を誇張して考へ、藝術運動を全く政治運動の、然かも一宗派の道具に歸依させてしまつたのである。そして政治と藝術の辯證的統一などは、事實において放擲されてしまつたのである。

この無批判的、機械的、盲目的な追隨主義者と、往年、實際運動内の小兒病者の批判に堪へかねて、藝術運動を捨て去つた要素とは、本質において同じものである。たゞ往年のそれが嘆然たる感傷的、浪漫的小兒病者の姿をとつてゐたのに反し、今日の、それが『全無産階級政治闘争



意識によつて、爪先まで武装してゐる！』と揚言してゐるだけの違ひである。マルクスは教へて言つてゐる。人をその言説によつて判断してはならないと。こゝに問題とす可きは、飽までも彼等に通有な、盲目的、無批判的、感傷的、浪漫的な小兒病的本質である。而して、今日の條件の下にあつて、この小兒病者等は宗派的分裂主義者のガウンを着けて立ち現はれてゐるのである。

若し日本のマルクス主義藝術運動が、政治と藝術に關して、實際上において斷乎として、辯證的統一の立場を持ちつゞけ、政治運動を批判し、且つ政治運動によつて批判されつゞ、困難な道を切開いて來ることをしなかつたならば、今日の進展はこれを見ることが出來なかつたであらう！而して今我々は、再び、偏政治主義者、宗派的分裂主義者の新装をつけて現はれて來た小兒病者に向つて勇敢に闘争し、それを克服しなければならぬ必要に當面してゐるのである。

七

宗派的分裂主義者にとつては、彼等の宗派的精神の浸透と、その浸透して行く過程と範圍との手段が必死的な問題であつて、爾餘の一切は時間的にも空間的にも問題であり得ない。されば政治運動の方面においても藝術運動の方面においても、過去の歴史、無産階級運動の具體的な進行



過程、いかに日本の左翼が長い闘争の過程において戦ひとられたかは、遂に彼等によつて忘却と無視の彼方に放擲されてゐる。

彼等は實に、奇蹟的に日本の土地に偶然に降臨したマルクス主義の使徒であり、彼等の降臨あつて始めて、日本の國土にマルクス主義が弘布されたのである！ 日本の無産階級の戦闘分子が、長い闘争の過程において、その血を灑ぎ、骨を削つて戦ひとつた左翼は、彼等の眼には左翼でも何でもないのである。

この歴史的實踐の無視、具體的進行過程の蔑視は、曩に政治運動の方面では、大正十一年（！）に提唱された『方向轉換論』にたいする福本和夫君の當爲的攻撃となつて現はれた。宗派的分裂主義の開祖福本君は、大正十一年の日本の資本主義の段階も解剖せず、また當時の日本の左翼運動の主體的條件も究明せず、たゞ單に當時の方向轉換はかくあるべきものであると主張し、そのことによつて、今日における彼等の宗派的分裂主義を理論づけようと企てたものである。

日本の無産階級は、實に、當時、天の一方からマルクス主義の使徒が降臨して、全無産階級政治闘争意識の護符を撒布してくれなかつたことを不幸とすべきである！ たゞそれだけを無上の不幸とすべきである！ そして當時の諸條件や歴史的段階は、これを地球の外に掃き出すべきで



ある！ その時こそ、聖なる神々は、掌を上げて微笑ませ給ふ。而してその時こそ、唯心論はヘーゲル以後、再び勝利の叫びをあげ、マルクス主義的理想國家は、日本の國土に建設される！

政治運動におけるこの歴史的實踐の無視は、文藝運動の分野においても、宗派的分裂主義者によつて、そつくりそのまゝ移植されてゐる。

最も明白卑近な一例を挙げよう。今回の逃亡者の一人田口憲一君は、數月前の本誌において前期の日本のプロレタリア藝術運動は、専ら作品行動に終始したと説明してゐる。而していまや眞正のマルクス主義前衛藝術家（！）が降臨して、その誤謬を正し、藝術運動は作品行動のみでない所以を宣命するのである！ まことに稀有のことであらねばならぬ。

だが、果して前期の日本のプロレタリア藝術運動は作品行動に終始したか？ 田口君は何の典據によりそれを發見し得たのであるか？

『文藝戦線』の前身たる『種蒔く人』に結集してゐたマルクス主義藝術家が、アナーキスト及びサンデカリストの政治否定と戦つたのは、作品行動の手段を以つてしてであつたか！

前期のマルクス主義藝術運動は、そのマルクス主義的性質の故に會つて作品行動に終始したこともなければ、作品行動に終始して足れりとする理論を展開したこともなかつた。



何よりも事實について見よう。

最初からマルクス主義藝術運動は、一個の集團行動として（ブルジョア文壇にかつて無い！）開始された。作品行動のみに終始したとすれば、何故にかゝる集團組織を必要としたか？ その集團はそれを無産階級運動の一單位として、當時の段階のあらゆる政治闘争に結合した。彼等は當時の全階級的闘争であつた對露非干涉運動に勇敢に結びついた。彼等は當時その産聲をあげた無産青年運動の一翼として結合した。彼等はまたロシア革命の進行を助くるために、殆んど主體的な役割をもつて、飢饉救済運動に参加した。彼等は帝國主義フランスのルール地域占領にたいして、當時の大衆組織たる全國無産者同盟を動員して、國際的抗議を試みた。彼等は日本最初の國際婦人デーを組織し、婦人運動の出發に備へた。彼等はその機關紙『種蒔く人』において、軍國主義に抗議し、農村運動、水平社運動、青年運動、婦人運動のために、全誌面を提供して戦つた歴史を持つてゐる。

これでもなほ前期の日本のプロレタリア藝術運動は、作品行動に終始したと言ひ得るか？ 否！前期の日本のプロレタリア藝術運動は、作品行動においても、今日よりヨリ旺盛な活動力を示したものに外ならない。



かゝる運動の實踐を無視して、果してよく唯物辯證的なマルクス主義藝術理論が組織され得るであらうか？ レーニンは、かゝる觀念論者に教へて言ふ。唯物辯證法は『一切の世界の進行をその自己運動において、その自發的發展において生ける實在において把握する。』と。

今回の逃亡者等中の、佐々木孝丸君は少くとも當時のマルクス主義藝術運動に参加してゐた一人であり、山田清三郎君はそれを目撃してゐた一人であつた。何故に、諸君は諸君の中の理論家によつて、プロレタリア藝術運動の歴史的實踐が蹂躪されてゐるのを無視してゐるのであるか？ 諸君は、數日の中に政治理論の注入手術を受け、一夜の中にその統一を劃策する代りに、先づもつて腦神經科の醫師について、その健忘症を治療すべきである！ また田口憲一君の如きは、マルクス主義藝術理論を作製するまでに、マルクス主義藝術運動の實踐と、マルクス主義政治知識のイロハを習得すべきである。諸君の理論闘争は、その治療をうけて後、その幼稚園を卒業した後、始めて眞實の理論闘争の形だけは具備する。

## 八

宗派的分裂主義はその宗派の結成及びその宗派意識の浸透のみを、唯一の有り得べき無産階級



運動と理解し、觀念するが故に、個々の運動における特殊性は全然これを認めない。個々の運動形態は、たゞ彼等の宗派の信者を、拾ひ上げる貯水池に過ぎない。

この誤謬は曩に彼等の組合運動にたいする政策の上に、濃厚に發現した。彼等は日常經濟闘争の大衆的組織としての組合組織を認識し得ず、且つそれによつて日常經濟闘争の技術的・戰術的重要性を無視し、遂には組合無用論さへ唱ふるにいたつた。

而して、闘争の實踐の手痛い批判を受けるや、彼等はあわたいしくも、僅か數ヶ月にして、その政策を變更し（實質的には今日まで清算してゐない。）て、日常經濟闘争の組織としての組合を云云してゐる。（實に一九二七年において！ 全無産階級的政治闘争意識を闘ひとつた後において！）

この宗派的分裂主義の誤謬は、藝術運動の上に、いかなる姿をとつて現はれて來たか？ 第一には藝術運動の團隊の特殊性無視であり、第二には演劇及び作品の技術的行動の輕視である。彼等にとつては、その小兒病の故に、その宗派的追隨性の故に、藝術家團體として特殊性を認め、藝術行動の特殊準備を認めるよりも、その小兒病的感傷性を満足させ、その宗派的信奉を手つとり早く表現すれば足りるのである。演劇技術及び作品行動の如き惱ましくも、小面倒なものは手足まとひ以外の何物でもないのである。



(一) 彼等が藝術家團體としての特殊性を認めないことの實例は、あらゆる點に現はれてゐるが、その最も初歩的なものを指摘すれば、その團體を構成するものが、政治家的乃至は事務家的氣質を具へてゐるものでなく、感受性に富み、鋭敏新鮮な感覺をそなへてゐる筈の藝術家である、と言ふことを忘れてゐる。今回の逃亡前後の彼等の行動は立派にそれを證據立てゝゐる。彼等は曩にも述べた通り、僅か數日の中に手を代へ品を代へ、露骨な分裂政策を講じ、なほ且つ感受性に富み、鋭敏潑刺たる感受性の持主たる藝術家に向つて、石の如く無感覺に、驢馬の如く従順に、天女の如く無感動に、クラークの如く黙々として之に従へと命ずるのである。かくの如き無理解、かくの如き見透しのない基礎に立つて果してよく全無産階級的政治闘争意識による文藝政策が樹立され得るであらうか？

それは正に、小集團性、日常利益追求性等を無視して、一般労働者政策を樹立すると同然である。

それは正に、半封建性、小所有者性等の前に眼を閉ぢて、農民政策を作製すると同然である。それはまた正に、動搖性、離反性等を無視して、中産階級政策を決定すると同然である。

全くイロハ以下、ABC以下の誤謬である。



この事實は實に、彼等宗派的分裂主義の藝術家自身が、實は藝術家でも何でもなくことを實證するものである。而して猶ほ彼等にしたらがへば彼等は立派に『前衛藝術家』であり得るのである！

(二) プロ藝及び今回の逃亡者等の宗派的分裂主義は、演劇技術及び作品行動の徹底的な輕視となつて現はれてゐる。その持つ理論にヨリ多くこの誤謬の發展する素地のあるプロ藝については言ふまでもない。曩にそのプロ藝の誤謬と戦ふことを宣言した今回の逃亡者等が、いつの間にか而して當然のことのやうにこの誤謬へと落ち込むとは、いかにそれら兩者が同質の存在であるかの、好個の實證である。

事實を見よう。プロ藝との分裂直後の『プリンス・ハーゲン』は致し方がないとしても、今回の逃亡者等の主宰した演劇運動が、果してプロ藝のそれと、實質において異つてゐたかどうか？ 尠くとも實質において異らうと意欲してゐたかどうか？ その宗派的分裂主義の故に、その行動は常に『無産者新聞』編輯局と、『勞農黨』書記局の淺薄極まる實利主義への、盲従となつて現はれた。かくしてその武器とする演劇の實質がいかに間に合せのものであり、いかに無準備のものであり、いかにいゝ加減のものであつても、彼等は更に意に介さないのである。彼等の意欲はただ、その奉仕する宗派の一片の讚辭である。それさへ與へられるならば、藝術の持つ特殊な情緒



的支配力によつて、社會の各階層へ深刻に入り込んで行く可きその本來の使命が無視されても、或はまた、眞のプロレタリア演劇を創造して、階級意識の藝術表現を完成する使命が放擲されても、そんなことは微塵も問題ではないのである。

私は、今回の逃亡事件の最中、逃亡者の先達で年來の友人たる佐々木孝丸君を訪ねて、數日後に迫る『ロビンフッド』の準備如何を訊ねた。私には、『プリンス・ハーゲン』の實質的未熟の記憶があり、その後の演劇部の活動が行き當りばつたりの追従的なものであつたといふ知識があり――佐々木君も靜かな心の中にはその一部を認めた――、且つ公演數日に迫つて『ロビンフッド』の臺本さへまだ完成されてゐないことを知つてゐたが故に、この問ひを發したのである。聯盟内部の對立は對立として、この第二回公演を出來得る限り完全なものにしたい、それが爲めには何等か出來得る努力をしたいと思つたのは、決して私一人ではあるまいと思ふ。云ふまでもなく聯盟の事業は聯盟員の合同責任であるが故に。これにたいして佐々木君は言下に答へた。大丈夫、うまく行く！と。私はたゞ驚嘆せざるを得なかつた。爾く演劇が容易なものであり、爾く演劇技術が安價なものであるならば、何故眞のプロレタリア演劇がこの人々の手によつて既に完成されてゐないのであるか？ この大膽と、無暴と、無謙抑とがあつて始めて、演劇運動が成立つ！ の



である。

だが、それならば勞藝創立の精神たる藝術的技術の習練の合言葉は、どうなつたのであらうか？　かくして彼等の爲すところによつて勞藝は急激にプロ藝へと接近し、藝術運動に完全に、機械視され、淺薄化されて來たのである。

作品行動（主として小説）については最早語る必要はないであらう。藝術上の小兒病者、宗派的分裂主義者によつて、いかにプロレタリアの作品行動の實質が低下されたか？　それは彼等の作品について觀れば明白である。藝術にたいするいま述べたやうな蔑視があり、その大膽と、無暴と、無謙抑と追隨性とがあつて、何處に實質的に充實した作品を提供し得る可能性があるか？

政治運動、組合運動に現はれた宗派的分裂主義の、文藝運動における發現形態は斯くの如きものである。このマルクス主義藝術運動よりの背反を克服することなくしては、藝術運動が眞に正しい藝術運動としての機能を果し、マルクス主義政治闘争の一翼たることは、絶対に出來ぬ。

全國二萬の諸者諸君！　わが光輝ある戰鬪的マルクス主義藝術運動の機關『文藝戰線』を徹底的に支持し、宗派的分裂主義者にたいする戦ひを最後まで戦ひ抜かしめよ！（二年十二月）

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相



## 政治と文藝について

私達の文藝運動の内部では、昨年中に、二度の分裂があつた。私はいまこの分裂について語らうとするのではない。その分裂を批判した言葉に關聯して、少し述べておき度いことがあるのだ。或る相當に權威ある批評家は、最近の勞農藝術家聯盟の『分裂』に關聯して、いつたいあれば、政治上の意見で分裂したのか、それとも文藝上の意見で分裂したのか、その點が明白でない、と言ふ意味の批評をしてゐたと記憶してゐる。

この批評を讀んだ時に、私は、それが右の分裂を批評した言葉として、妥當であるかないかは別問題として、その批評家の頭の中に、政治と文藝についての舊い觀念が、無批判に巢喰つてゐるのを感じないではおられなかつた。そういふ觀念を巢喰はせておく以上、その批評家には到底、こんどの『分裂』を理解することが出來ないし、これからも起るであらうプロレタリア文藝運動内の諸現象を理解することも出來ないであらう。そう私は考へた。



この批評家の頭の中では、政治と文藝がすっかり排他的に考へられてゐる。その意味ではこの批評家の頭も、世間大多數の文藝家の頭も少しも違つてゐない。政治は政治、文藝は文藝、どこまでも行つてもこの公式である。

この公式の生れた史的過程をこゝに講義してゐる餘裕はない。が、政治と文藝とをそんな具合にあつかひ、排他的に考へる考へ方は、確かに歴史的なものだ。歴史の或る時には決して、その兩者がそれほど排他的には考へられなかつたものである。これは斷定的に言つて差支へないと思ふ。政治には政治の特殊要素があり、文藝には文藝の特殊要素がある。これは分り切つた話で、であるから政治と言ひ文藝と言ふのだ。だが、それならばこの對立物は、全然排他的な對立物であるのか、それとも統一の中にある對立物であるのか。

これも歴史的に見て、嘗て政治と文藝とが排他的に對立物であつたことはない。つねにその間に相互關係が成立つてゐた。たゞその相互關係がヨリ多く當事者に意識されたか、ヨリ尠く意識されたかの差違があるばかりだ。或る歴史的時期にはそれがヨリ尠く意識されて、イデオロギーの上に政治と文藝の排他的對立觀として反映し、他の歴史的時期にはそれがヨリ多く意識されて、イデオロギーの上に政治と文藝の統一的對立觀として反映したに止まる。



この二つのイデオロギーは、歴史的・時間的に言へば前後繼起的ではあるが、或る歴史的時期における同時的存在を許さぬものではない。即ち今日見るやうに、一つはブルジョアジーの文藝家に代表されて、他はプロレタリアートの文藝家に代表されて、同時に同一文學社會内に存在してゐる。

日本のプロレタリア文藝運動だけについて見ても、その發生の端初から、嘗て政治と文藝が、その全行動の上に、排他的に取扱はれたことはなかつた。初期のプロレタリア文藝運動は作品行動に終始してゐたなどと言ふ『説明』は、全然歴史を知らない者の言葉である。

プロレタリア文藝運動家にとつては、プロレタリア解放といふ全目的が、その意識の全部面を占めてゐる。また占めておるべきである。したがつてその全目的への一步前進は、政治的な問題でもあれば、文藝的な問題でもある。政治だけの問題であるものでもなければ、文藝だけの問題であるものでもない。政治と文藝とがつねにその全目的の意識の中に抱合されてゐて、相互關係を保つて、統一されてゐる。さればプロレタリア文藝運動は、その端初から、表見的に言へば政治的でもあり、文藝的でもあつたのだ。そこにこの文藝運動に、他の文藝流派の運動と異つた、階級的文藝運動たる特質がある。



そこで一つのプロレタリア文藝運動内の現象を取扱ふ場合にも、また一人のプロレタリア文藝家を取扱ふ場合にも、取扱ふ方の側に政治と文藝の排他的な觀念があつては、その取扱ひ方が不十分となるわけだ。

ところで政治と文藝の排他觀は、ブルジョアジの專有物でもなく、つい一二年前までプロレタリア運動の實際運動家と言はれる人々の間にも、全體的に擴がつてゐた。と云ふのは彼等の素朴な文藝觀は、その全部既成觀念の無意識な肯定にすぎないからである。彼等が、文藝を侮蔑し、文藝運動を階級運動の一部でないと切言したのは、その頃であつた。また政治と文藝の謂ゆる辯證法的統一の自覺のないプロレタリア文藝家の一部が、實際運動家やブルジョアジの批評家の非難を眞にうけて、文藝運動を捨て去つたのも、この時期であつた。

ところが階級運動の發展もこの一二年來、實際運動家をしてあわたいしく、文藝運動の意義を認めさせた。(もつともその意義と言つても、まだ機械的に考へた意義、即ち利用的意義だけだが。)するとこんどはプロレタリア文藝家の或部分は、大波のやうにその實際運動家に追隨して、政治と文藝の謂ゆる辯證法的統一は愚か、文藝をすつかり機械的に政治的に隸屬させてしまつた。この人々は實に曩に實際運動家の排他觀に影響されて、文藝運動をすて去つた人々と、本質的に變



るところがないのだ。

だが、前の場合にも正しいプロレタリア文藝運動は、實際運動を批判し、政治を批判しつつ、またそれから批判されて、相互關係を保つて、辯證法的に展開して來た如く、後の場合即ち現在において、その道をとつて進んでゐる。この一年の分裂は、この表面の現はれに過ぎないのだ。

プロレタリア文藝運動の逞ましい發展は、政治と文藝の排他觀からは絶対に生れない。文藝を政治に隸屬させる偏政治主義からも生れない。それは獨り、政治と文藝の辯證的統一のなかから生れる。

これは實際において、かなり困難な、多くの場合、『流れに逆つて』進む道である。

(二年十二月)



## 大衆の現實について

『大衆の中へ』とか、『大衆に訴へる』とかいふ言葉が、無産者運動の陣營からばかりでなく、この頃では既成政治家の口からさへ、盛んに發散されるやうになつた。

いつたい大衆と言つただけでは、至極曖昧であつて、外國で政治論策の場合にこの言葉を使用するときには、たいていアルバイター・マツセ労働大衆とか、ウエルクテーター・ゲン・マツセ勤勞大衆とか言つた風に、その性質を規定してかゝるのが、普通のやうである。

労働大衆、勤勞大衆と言へば、そこに餘程明確な限界がついて、一個の社會的範疇を示唆することが出来る。つまり筋肉労働にせよ、頭腦労働にせよ、労働による以外にはその生活を維持する手段のない大衆、一般に勤勞によつてのみ生活を維持してゐる大衆といふことになつて、そこから明らかに遊食者の範疇が取り除かれる。

たゞ大衆と言つたゞけで、その性質を規定してかゝらないとすれば、實際は無意味に近いと



言つてよい。否、そこにまつはる曖昧性の故に、いろんな混雑や、危険さへ生れて來ることがある。

既成政治家だちが大衆と言ふ場合、それで指標しようとするものは、たゞ社會の全員と言つたほどの範圍であつて、労働大衆や勤勞大衆もふくまれておれば、遊食者の大衆もふくまれてゐる。たゞ漠然たる大勢の民衆と言ふ意味である。

これはかの文壇の既成文學者だちが、大衆文學とか、大衆作家とかいふ場合の、『大衆』でも同じことである。この場合何もそこに明確な社會的範疇が指標されてゐるわけではない。たゞ漠然と、これまでの文學愛好者の範圍でなく、モット廣い讀者大衆といふほどの意味である。だから、謂ゆる通俗でさへあれば何んでも彼でも大衆文學であり、筋を追つて『面白く』書きさへすれば、誰も彼も大衆作家と呼ばれるのである。彼等大衆作家と、謂ゆるプロレタリア作家とを比べて考へると、事態が一層ハッキリする。大衆作家は漠然たる大衆を相手にしてゐるのであるが、プロレタリア作家は、明らかに労働大衆、勤勞大衆を對象としてゐる。何でも彼でも大勢の民衆に讀まれさへすればいゝと言ふのは、決してプロレタリア作家の念願ではない。大衆は大衆であつてもそれは労働する大衆であり、勤勞者の大衆である。そこへ行くと、謂ゆる大衆作家たちは、無規定的である。



既成政治家たちも、つい近い過去までは大衆などと言ふ言葉は口にしなかつた。文壇でもやはりさうであつた。既成政治家たちの場合には、廣汎な社會層を指標しようとする時は、せい／＼のところ『民衆』であつたし、文壇では『通俗』といふ用語で、その作用する範圍を示唆してゐたものであつた。ところがその民衆や俗流が『大衆』に變つた。それも極く最近のことであり、既成政治社會では、こんどの普選を楔機として、それがやゝ一般的となつたと言つてよいであらう。

曩の説明でも分る通り、『大衆』といふ新らしい言葉になつたところで、既成政治家たちや大衆文學者だちの場合では、民衆や俗流と言つた意味と少しも變らないのであるから、何もわざわざ耳慣れない言葉を持ち出す必要はなさうなものである。だが、やはり彼等としてからが、『大衆』でないとならないもの、乃至は納らなくなつたものがある。

それは言ふまでもなく、労働大衆、勤勞大衆の社會的進出である。元來、大衆と言ふ言葉が、初めて多少の政治的意味、社會的意味を與へられて使用されたのは、無産者運動の内部においてである。最初は耳慣れない言葉であつたし、その響きも社會的に強くはなかつた。これは、やはり當時の労働大衆、勤勞大衆の社會的進出の度合を反映したものであつて、その進出の度合が高



まつて来るにしたがつて、それが漸次に耳慣れて來、その響きが社會的に強くなつて來たのである。

かうなるとこの言葉を無視しておれない。否、その言葉の背後の社會的勢力を無視しておれない。しかもそれが普選のやうな場合、即ちその勢力が鮮明に前景へ歩み出て來る場合に、それを無視することは到底出来るものでない。そこで大衆と言ふ言葉が、たとへば既成政治家だちによつても取上げられる。だが、この場合注意しておかなければならぬことは、彼等によつて取上げられた『大衆』は、決して無産者運動が指標して來た大衆ではない、と言ふことである。労働大衆、勤勞大衆を指標した言葉が、たとへば言葉として彼等に取上げられて、その社會的範疇がぼかされてしまつたのである。こゝに既成政治家の欺瞞がある。この欺瞞は、彼等が大衆の政治的要求を代表すると揚言する欺瞞に應ずるものであることは、説明するまでもないであらう。

言葉と言ふものは妙なもので、その意味する具體的内容が異つてゐても、その言葉そのものが明白な内容を持つてゐるものでもあるかのやうに、流通する。極端な保守主義者も、時として『自由』を口にすれば、進歩主義者も乃至は革命主義者も、『自由』を口にする。だが、その『自由』の内容は明らかに變つてゐる。



そう言ふ具合に、今日では誰も彼も大衆を口にする。大衆を呼びかける。大衆に訴へる。それでなければ尠くとも進歩的に見えないからである。『大衆』は今や、一種の魔術性を附與されたと言つてよいであらう。

だが、さう言ふ欺瞞を取りのぞき、そう云ふ魔術を振り拂つて、あとに残るものは何んであるか？ それは飽くまでも、労働大衆であり、勤勞大衆である。これが眞の大衆なのである。

或はかう言ふ人があるかも知れない。大衆とは文字通りに大衆であつて、社會の最大可能の多數者であると。だが、その意味の大衆は、社會的に何等の統一體を形成するものではない。そこには明らかに利益の對立があり、意識の抗争がある。その對立、抗争のあるものを、その對立、抗争をほかしてしまつて、乃至は無視してしまつて、たゞ漠然と一緒に取り扱つてしまつたのでは、取扱ふことは勝手ではあるが、社會的に言つて、無意味であり、政治的に言つて、欺瞞である。

搾取者大衆、遊食者大衆と、労働大衆とは、對立してゐる。その利益に決して協同がないし、その意識には決して一致がない。大衆は、搾取者、遊食者のそれであるか、労働者、勤勞者のそれであるか、でなければならぬ。

ところで搾取者の大衆、遊食者の大衆は、嚴密に言つて、これを大衆と呼ぶことは出来ない。

大衆の現實について



細かい穿鑿はとにかくとして、その社會における數だけから考へても、それは少數者の範圍である。だから、事實においては、現實の社會には、勞働する大衆、勤勞的大衆と、搾取者、遊食者の社會的集團との對立があるばかりである。大衆は、勞働大衆、勤勞大衆を除いては、何處にもないのである。

既成政治家やその他が代表する利益は究極においての搾取者、遊食者の集團の利益であるが、彼等がその支配のために惹附けようとする對象の範圍は、勞働大衆や、勤勞大衆にさへ延びてゐる。そこで彼等は、大衆を口にせざるを得ない。欺瞞のからくりはこゝに潜んでゐる。こんどの總選舉の結果に見ても、この欺瞞のからくりが、その所期の目的をどれだけ成功的に果したかよく窺はれるであらう。

然らばその勞働大衆、勤勞大衆の性質はどうであるか？　これはまだ階級的に組織されないものであつて、その現實の利益に協同があつたにしても、その意識に統一のない一つの大きな社會的集塊である。その意識に統一のある部分は、その大衆の中から、或は經濟上の組合として、或は政治上の政黨として組織されたものである。この部分は、いつの場合にも、比較的少數者である。組合や政黨が、勞働大衆や勤勞大衆の大部分を結合すると言ふ場合は、ほとんど絶對にあり



得ないと言つてよい。大衆は常に存在する。

だが、その組織された部分、意識に統一のある部分が『大衆を動員』することは可能である。それは、大衆の意識の雑多性が背後に押し遣られて、その利益の協同が前面に強く押し出される時である。それは例へば戦争の場合とか、経済的急迫の場合とかである。この條件が生じた時、それは一種の××的形勢だと言つてよいのである。大衆の利益協同を、多かれ尠かれ呼び醒して、多かれ尠かれ、それを動員することは、すべての機會において可能であるが、しかし眞に『大衆を動員』し得ることは、その形勢があつて始めて可能なのであつて、××を行ふものは、その意味において、常に大衆である。

大衆の批判に信頼するとか。大衆の審判に待つとか言つたことがよく言はれるが、大衆それ自身は、いまも言つた通り、意識に統一のない大きな集塊であつて、ある時期に、その利益協同によつて統一體を形成するに過ぎない。だから大衆は常に、意識に統一ある部分によつて、率ゐられなければならない。少し六つかしく言ふと、大衆の自然生長性が、前衛の目的意識性によつて率ゐられなければならない。その時初めて、大衆が大衆として働き出すのである。(三年三月)







## 第四部

### 廣津和郎君の告白を讀んで

—

『改造』六月號所載の廣津和郎君の『わが心を語る』は、『チエホフの幽霊』と『久米正雄の挨拶』の二つの項から成る短い文章である。私はたまく——まことにさうだ、私はまとまつた何かを期待して、待ち構へてそれを讀んだのでないから——その文章を讀んで、久し振りに眞實のこともつた、文章らしい文章に觸れたやうな氣がした。

これは廣津君の心の告白である。巧くは書かれて居るが、飾り氣のない、正直な心の告白である。私にだけさう考へられるのかも知れないが、この頃はかういふ種類のむじゆんをそのままさらけ

廣津和郎君の告白を讀んで



だし、柔かい、こまかく動く心をそのまま文字に寫したやうな、告白的な、自己批判的な文章は、一般に歡ばれない。だが、私は、かういふ文章に、何といつていゝか、例へばさびしい夜道を親しい友達と二人で歩きながら、しみじみとその心の物語を聞かされるやうな、割引の出来ない眞實を感じる。少し誇張していへば、かういふ文章にしか、さういつた眞實を感じない。

もつとも理論的なものになると、それはいづれこちらの準備も、その受納の仕方も、それとは異ふ。こゝで眞實——その理論を肯定すると、否定するとは、別だ——の感ぜられるのは、とにかくその理論が、論理的——もちろん形式論理を指してゐるのではない——に正直に運ばれてゐて、そのいはうとする中心がハッキリと論者の内部につかまれてゐて、ごまかしや、回避や、故意の無視がない場合である。

ところが感想的なものにも、理論的なものにも、この頃は、さういつた文章が極少くなつたやうに思ふ。本統の心の動きが、手にとるやうにこちらに通ずる感想的告白的文章にも、論旨と論理とがハッキリしてゐる理論的文章にも、私はほとんど接しない。總てが何だか、機械的になつたやうである。總てが何だか、鐵のやうに固く、乃至は石炭がらのやうにカサ／＼に、なつたやうである。もつとも、私などのやうなのが舊くて、どんな意味においても情感的な要素を排



するのが新しいのかも知れない。

それはそれとして、私は廣津君のあの告白の眞實に導かれて、廣津君の心にたどつて來た足跡、更にそれから引いて一般的に、文壇的知識人のあるひはたどつて來た、あるひはたどりつゝある足跡について、いろ／＼と考へ、感じた。それをこゝに書きとめて見よう。

○

平生からもさうは思つてゐたが、この告白を讀んで特に強く感じたのは、廣津君の心がいかに藝術家的であるか、といふことである。彼はものを手に取り早く知り分けるそう明さを持つてゐる。だが、それではどうしても濟まされない。自分自身の心と身體を通じて、ほんとうに知りつくさなければやまない。たいていの人なら、いゝ加減で切りあけて、あつさりと方向轉換するところを、廣津君の藝術家的な、餘りに藝術家的な心は、廣津君をして、どうしてもさうさせないのである。

この告白は、廣津君も説明してゐるやうに、要するに自由主義的個人主義の破産の告白である。個性は創造の泉であつて、個性を深く掘りさげてゆけば、その泉にぶつかると信じてゐた心の破産の告白である。つまりさう信じて、正直に、わき目もふらず、個性を掘りさげて行つたら、そ

廣津和郎君の告白を讀んで



こには創造の泉は無く『虚無のほら穴』が口を開いてゐたのである。

これだけのことを経験するために廣津君は長い——半生といつてもいゝかも知れない——心の歴史をささげた。いゝ加減にその行方の見透しをつけて、乃至それに見切りをつけて、ひと思ひに轉回出來さうなものであるが、それが出來なかつたのである。

その意味で藝術家は、ひと一倍苦しむものだといつてよい。私は時々にはそれを豫感したり、迷つたりしたであらうが、それでも正直に、執えうに、島村抱月、ツルゲネフ、ガンチャロフ、チエホフの踏んだ道を追つて、『虚無のほら穴』までやつて來た廣津君に、一種の尊敬を禁じ得ない。

## 二

だが、私はこの告白を讀んで、この眞實に動かされながらも、かういふ廣津君の告白は、これまでもいつかどこかで聞いたやうに想はれてならなかつた。この文章のやうなハッキリした言葉ではなく、無論『……過去を振り切つて、新たな一步を踏みださう』といつた跳躍的な結語を持つたものではなかつた。だが、とかくかういふ氣持、それに基く告白は、どこかで聞いたか、乃至廣津君のまわりから私に感ぜられてゐた。そこで最初私はばく然と、廣津君といふ人は、い



つも同じことをくり返してゐて、一向足の前へ進まぬ人だと思つた。

だが、よく考へて見ると、そこに廣津君の藝術家的に豊かなところがあるので、足の前へ出ることを彼に要求するよりも、本統に足が前へ出るまで、考へたり、悩んだり、退いたり、いやになつたり、起き直つたり——一刻も固定しないやうに要求するのが本統であると、分つた。そして、改めて『我々は我々の「疲勞素」を食ひつくすところのその物質に信頼を置かう。そして過去を振切つて、新たな一步を踏みださう』といふ結語を味はつて見ると、そこに聞かれる斷然たる、意志的の響き——これまでの廣津君にはほとんど聞かれなかつた——は、廣津君が本統に足を踏みだす掛聲の響きのやうに、またその思ひ切つての前進の宣言の響きのやうに聞かれたのである。

が、またその後から、それはそれに違ひないが、このかけ聲、この宣言は、いはゞ足取りの主要方向の決定であつて、これで『抱月の幽霊』や『チエホフの幽霊』が、廣津君の眼から永久に消えるものではないと考へられた。この告白は、これらの個人主義的亡靈に對する退去命令ではあるが、同時にまた、これまでの廣津和郎君自身に對する退去命令である。これは容易に出来ることではない。

廣津和郎君の告白を讀んで



『新しく一步』を踏だしてからも、なほ、人々と同じやうに、廣津君は苦しむであらう——私はさう思つた。

○

廣津君の心の行詰まり——告白は、さきにもいつたやうに、自由主義の破産の告白である。この破産は、たれにでもすぐ分るやうに、一般の知識人、特殊に文壇的知識人の大部分に、共通なものである。現に廣津君も、外國へ旅立つ氣持として『だつて、それより仕方がないだらう。ね』と告白した久米正雄君について、物語つてゐる。

實際、『大正五六年頃から八九年頃までの間に、文壇に出た年代の人々』で、多かれ少かれ、自由主義的個人主義の破産を経験しないものはないであらう。たゞその歩み方に個人によつて遅速の差があつたばかりである。廣津君や、久米君は、その足取りが重かつたとも、あるひは遅かつたとさへも、いふことが出来る。

これにはいろいろ原因が作用してゐるであらう。さきにもいつた藝術家的な心も、もちろん強くそれに作用してゐるが、そればかりでもない。廣津君の場合にして見れば、彼の都會的の性格も少からずそこに働いてゐると考へてよいであらう。



廣津君と同時代の人で、同じく『虚無のどう穴』への道をとつて正直に歩きながら、廣津君より一足先に、『過去を振切つて、新たな一步』を踏だした——もちろん、主要方向的に——人に、私の知つてゐる人で、細田民樹君や、細田源吉君がある。(兩君は、一足先であつたばかりに、會つて廣津君から、その轉向に疑ひをはさまれたことがあつたやうに記憶してゐる)兩君ともに『虚無のどう穴』への水先案内に、正直に、執えうにくつゝいて行つた點では、廣津君に勝るとも劣らない。その兩君が一足先に、廣津君にくらべると割合にあつさりと、くびすをめぐらして仕舞つたのは、兩君のおかれた直接の環境が第一に、次いでは兩君の半田園的な性格が、その因となつたものだ、と私は解釋してゐる。

### 三

廣津君は、この告白の終りの方に、いまのいはゆる既成文學者に對して、重要な暴露をやつてゐる。非常に調子高く、強く書かれてゐるので、少し長いが引用して見よう。

『天好し、地よし、前よし、後よし、左よし、右よし、この不秩序な自由主義が、何と人を虚無にしか陥れない不自由主義であつたかを知つた時、私は私の周圍に、それらの自由主義が信奉し

廣津和郎君の告白を讀んで



た過去の眞理の「獨自性」の名において、めい／＼の道を歩いて行つた人々が、それ／＼の行方で、皆くた／＼に疲れ切つてしまつてゐる姿を見る。「神」の聖壇にかしづいてゐた作家、「人類」の聖壇にかしづいてゐた作家、「悪魔」の聖壇にかしづいてゐた作家、「個性」の聖壇、藝術の聖壇にかしづいてゐた作家、それ／＼がそれ／＼の行方で疲れ切つてゐる。中には疲れてゐない人々もあるが、しかしその疲れてゐない人々の昔ながらの作物を見せられる事に、彼等と同時代だつた我々が、最早疲れて來てゐるのである——なぜなら、そのゆき止まるところが解つてゐるから。』こゝにはいはゆる既成文壇の大家が、こと／＼く俎上に上つてゐるといつてよい。武者小路氏もゐれば、谷崎氏もをり、志賀氏も里見氏も佐藤氏も、たれも彼もそこにまざ／＼と示されてゐる。そのたれもが一樣に、廣津君によると、それ／＼の行方において疲れてゐるのである。疲れ切つてゐるのである。疲労した文壇、疲労し切つた大家。これはまことに既成文壇にたいする一つの暴露であると共に、一つの挑戦である。

もつとも既成文壇が疲労してゐること、行詰まつてゐること、たゞ、隋性で作物が生産されてゐること、これは廣津君が暴露するまでも無く、人々によつて指摘されて來てゐることだし、今日ではチャーナリズムさへがそれを認めて來てゐる事實である。だが廣津君が、既成文壇の御曹



子たる觀のあつた廣津君が、それを少しの躊躇もなく認め、調子高く指摘してゐることは、何といつても一つの挑戦である。

疲れ切つた既成大家。人々は、今や、何の遠慮も、顧慮もなく、そらいひ放つていゝのである。そしてそんな疲れ切つた、隋性的な存在は、蹴飛ばして仕舞へ！ とさういひ放つてもいゝのである。廣津君の正直な告白と暴露とが、それを保證してゐる。

もちろん、廣津君によつて疲れてゐると註釋された大衆も、自身で必ずしも疲れてゐると認めはしないであらう。隋性的にせよ、作品を發表してゐる大家は、恐らくさうであらう。そして廣津君の挑戦に應ずるであらう。

あるひはまた、廣津君の註釋に刺激されて、自己の疲勞を認め、さまざまな告白がなされるであらう。

——私達はこれまでブルジョア文壇の崩壊といふことを口にして來たが、その崩壊乃至自壊作用は實際にはかういふ過程をとつて行はれるのである。そしてそこから、一人の自覺者が現れ、その現れ方はどんなであつても、その崩壊乃至自壊作用は早められる約束をもつてゐる。

有島武郎氏の宣言、芥川龍之介君の自殺、それから廣津和郎君の告白、私はこれらをその自壊

廣津和郎君の告白を讀んで



作用へのそれ／＼の大きな力として、特にこゝにあげておかう。

四

廣津君の告白を讀んで、ほとんど同時に、故芥川君を想ひださない人は無いであらう。廣津君も、この文章の末尾に、芥川君についていつてゐる。『……このチャンピオンの自殺は、結局、過去の文化の重荷に動きのとれない、それ故に神経のすりへつて行く、ある一團の作家達の苦悶のもつとも顯著の現れだつた。『點鬼簿』から「齒車」にいたる、彼の最後の諸作は過去の文化の地獄篇である。』と、正當にいつてゐる。

それなら自殺した芥川君と、告白して『新たな一步』を宣言した廣津君と、どこのちがひでさうなつたのであらうか？ 芥川君には、さういつた疲勞に加へて乃至その結果つき詰めたペシミズムがあつた。彼は、生存は醜惡であるとさへ考へた。が、廣津君のところには、その疲勞は深いものがあつても、芥川君のやうなペシミズムがない。芥川君には、自由主義から轉換してゆくべき新らしい生活すら地獄であつたが、廣津君にとつては、それは天國でないまでも少くとも地獄ではない。同じ苦の生活であるにしても、疲勞の苦とはちがつた苦の生活である。だから芥川君



には、何としても生存してゐて轉換して行くところはなかつたが、廣津君にはそれがある。芥川は自殺といふ一擧の破壊的な手段で少くともその苦痛から自己を解放したが、廣津君は、相當長い間の内心の鬭争によつて、少しづつ自己を救ふ要素——疲勞素を食ひつくす物質——を蓄へて行つた。そこに二人の生き方にちがひが出來たのである。

同じ苦悶の十字架を負つて、三人のうちの一人は、不自然死を選んだし、一人は『尻尾を巻いて逃げる』やうな氣持で外國の旅へ立つたし、一人は『過去を振切つて、新たな一步』を宣言した。自滅と、逃避と、前進と、私はこゝに文壇的知識人の苦悶の三つの典型的な解決を見る。と同時に、それは一般的知識人の前に約された三つの運命でもある。

○

私はこゝで廣津君の告白の批判は、一切しないつもりであつたが、最後にちよつとそれを加へておく。

廣津君は、自己の又他の人々の自由主義的個人主義の行詰まり——疲勞を、全然、主觀的にしか考へてゐない。掘つて掘つて掘り下て行つた末が『虚無のほら穴』であつた。『自己の皮をひんむきひんむきして行つて』ついに虚無に達した。その道をどこまでもどこまでも歩いて來たため

廣津和郎君の告白を讀んで



に、疲れ切つてしまつた。さういふ風に取り扱つて居る。

だが、廣津君およびその他の人々に、この虚無感と、疲勞を與へたものは、さうした主觀的原因のみではなかつたはずである。廣津君らが、その道を正直にわき目もふらず、執えうに歩いてゐる間に、廣津君らを絶えず悩まし、動搖させ、それによつて虚無感と疲勞とを増さしめ、乃至起さしめたものは、廣津君らを取巻く、まづ文壇的環境、次いで社會的環境の現實ではなかつた？ その現實からくる壓迫がなかつたら——そんなことはあり得ないが——あるひは個性のうちに創造の泉を求めて、うむことなく疲れることなく未だにそれを掘下げて行つてゐたかも知れない。

私は、この告白を讀んでゐるとき、心持、主觀の方面のこれだけの説明が環境、社會の方面のそれに相應する説明によつて補充されてゐたら、讀者の我々のみでなく廣津君自身にもこの告白が遙に多く役立つてゐたであらうことを思つた。そして『過去を振切つて、新たに一步を踏みださう』といふ結語が、ハツキリと何ものかを我々の眼に焼きつけたことであらうと思つた。

(四年五月)



## 北氏に對立して

—

且君は、私に、この間の北氏の本欄（「讀賣」）での議論にたいして、私の思想的立場を書けとのことであつた。私は、あの文章では北氏は十分に氏の論點を展開してゐないから、あれを批判することは御免を蒙るが、私独自の思想的立場を、北氏のそれと對比しつゝ展開する仕事なら、やつて見てもいゝと答へた。これからその仕事にとりかゝるのである。

その前に一寸述べておく。北氏は私の同郷の先輩で、私は親しく氏の御世話になつたこともあり、また、北氏が現在、痴人の夢として侮蔑する社會主義のことにかけては、私は、氏の生徒なのである。少し述懐めくが、『青年のセンチメント』を多分に持つてゐて、劍道に俊達すると共に社會主義を熱唱してゐた青年北氏に、私はどれだけ傾倒したことか。だがそれは昔の昔、所も佐渡ヶ島の出來事である。今日の北氏は、共產主義者を馬鹿者と呼び、社會主義を痴人の夢とけな

北氏に對立して



す、中年の『知者』であり私はそれとちやうど正反對なことを考へてゐる中年の『馬鹿者』である。しかもその中年の『馬鹿者』が、中年の『知者』と對立して、思想的立場を展開することを求められた。やはり世の中は不思議なもので、さう『知者』ばかり居ないものと見える。

尤も、私の思想的立場を展開すると言つて見たところで、北氏同様『十枚や十五枚で根本の理論は述べられない。』これは諒解して貰へると思ふ。そこで北氏のあの文章の論點を手がかりにして、可能な範圍で、北氏のそれと正反對な私の立場を展開することにする。最初にも言つた通り、これは批判と言はれる仕事ではない。

北氏は世の一部から反動思想家と呼ばれてゐることを、ひどく氣にして、反動の意味について、卓を叩いてゐる。北氏の言ふ通り、問題は結局、『共產主義への道』が進歩への道かどうかによつて解決する。ところで『共產主義への道』が、北氏の事もなげに説明するやうに『無秩序と無政府と反國家』への道であつたら、それこそ進歩への道とは言はれない。従つて北氏は反動思想家で無くなる。だが、私の觀るところでは、共產主義は決して『無秩序と無政府と反國家』の別名ではない。北氏の奉仕する資本主義こそ勞・農・勤勞民の大衆から見ると、その名に値するものである。何故と言つて、今日國民の最大多數を構成する勞・農・勤勞民の大衆にとつては、政府



が與へられ、國家が與へられてゐるのであらうか？ 貧化と失業が『秩序』であり、拘束と暴壓が『政府』であり、資本家、地主の階級支配が『國家』であるといふ意味においてのみ、それらが與へられてゐるに過ぎない。共產主義への過渡においてはこれが正反對になるだけである。今日の少數ブルジョアジの地位と、今日のプロレタリアートの地位とが顛倒するだけである。少數者のための秩序、政府、國家よりも最大多數者のための秩序、政府、國家を、私は、北氏に反して、進歩的と觀る。この意味で私からは遺憾ながら北氏は反動思想家である。

## 二

北氏によると、青年學生の共產主義思想化は單なる「青年のセンチメント」の現れに過ぎず、中年者の共產主義者は『馬鹿者』だとのことである。これは威勢はいゝが、議論にならない。維新常時の青年のセンチメントが、外のハケロを見出さないで、何故開國論にそれを見出したか？ 今日青年のセンチメントが、何故ガンヂー思想や階級協調思想にそれを見出さないで、共產主義思想にそれを見出すのか？ これが問題である。次に中年者の共產主義者は、北氏によると、馬鹿で、阿呆で、痴人である。さうだとすると、マルクスも、レーニンも馬鹿の最大なもので、

北氏に對立して



反共産主義の思想を（願はくば北氏に追隨して）抱く一青年にも劣る痴人である。かうなると議論がカリカチュア化されて、議論にも何にもならない。

青年には、北氏の言ふ通り、夢想的要素が多いし、『心臓の教養と脳髓の訓練』とは、これも北氏の言ふ通りに、『平行しがたい』でもあらう。だが、共産主義の科學的の正しさと否との問題と、そんな常識心理學と何の關係があるか？ 共産主義の科學的價値を、青年の心的傾向の辯で是非するのは、相對性原理の科學的價値を、猶太人の心的傾向の辯で是非するのと等しい。

北代の共産主義攻撃はこれまでのものでも、私の眼に觸れた限りでは、餘り經濟的批判に立脚してゐない。或は殆ど立脚してゐないかも知れない。こんどの文章でも青年の心理とか、中年者の頭腦の變化とか言つた點からの、科學的に無意味な批判が相變らず主となつてゐるが、ホンのチヨツピリ經濟的解剖が挾まれてゐる。北氏によると、共産主義の時代になつても、資本主義の時代と同様、搾取は止まない、産業の發達は搾取に基くものであつて、『生産者特に勞働者がその勞力に價する報酬を受け取つて、之を消費するとなると、工場の一棟も増さず、機械の一臺も殖えない』と言ふ。いま頃この理窟の間違ひ位を即座に觀取し得ない者はさうあるまいから、これを反駁するのは迂愚な話、だが私の立場を明かにする上から、これに一寸觸れておかう。



生産者はその生産の成果の一部を蓄積しなければ『工場の一棟も増さず、機械の一臺も殖えな  
い』のは、確に事實である。早い話が北氏がその収入の全部を消費してしまつたら、本一冊も買  
へなければ、住家一軒建てられないのは、事實である。これは、正に『資本主義の時代でも、共  
産主義の時代でも變りはない。』否、人類の經濟的發達のいかなる時代を通じても變りはない。

だが、この蓄積が、北氏の言ふやうに、いかなる場合にも、搾取であらうか？　これを搾取だ  
とすると、妙な事實が出來上つて來る。いまの例で言へば、北氏がその収入の一部を蓄積して、  
本を一冊求め、住家一軒建てても、これは搾取である！　労働者の團體が、報酬の一部を集めて、  
集合所を設けても、これが搾取になる！　いや、資本家が金を出し合つて、社交俱樂部をたて、  
も、搾取だ！　即ち自分が自分で搾取すると言ふ妙な關係が出來上つて來る。私達の字引にはそ  
んな搾取と言ふ字はない。私達の字引にある搾取といふ字には、或る人が、他人のものを搾り取  
るといふ意味しかないのである。

### 三

資本主義の時代には『生産者特に労働者』の生産活動の成果の一部の蓄積されたものが、生産

北氏に對立して



者、労働者のものとならないで、資本家のものと成る。言ひ換へれば資本家は、労働者の労働の成果の一部を搾り取り、盗み取る。だから、搾取があるのである。だが、共産主義への過渡の時代、乃至共産主義の時代には、關係が全く異ふ。生産活動の成果の全部が、生産者のものとなる。その蓄積された一部が、何者からも、他の如何なる階級からも、搾り取られもしなければ、盗み取られもしない。だから、こゝには搾取のあり得やう筈がないのである。

蓄積は搾取だといふ飛んでもない定義で、共産主義を攻撃するなら、北氏の共産主義攻撃は、實は共産主義攻撃ではなくなつて、人類の一切の時代の經濟的蓄積の攻撃となつて仕舞ふ。共産主義者を呪はないで人類を呪へ！

北氏は、この飛んでもない定義を裏付けるために、ソヴィエツト・ロシアの『現實』を云々してゐる。いまソヴィエツト・ロシアの經濟的現實を解剖したり、説明したりしてゐる譯に行かないが、問題はソヴィエツト・ロシアの國家權力が、労働者と農民の手にあるか、即ちロシアの共産黨が、果して労働者と農民の前衛であるか？ 否かに歸する。この問題に直接に觸れなければ、搾取も非搾取も問題にならないのである。

私の見解に従ふと、ソヴィエツト・ロシアの國家權力は、立派に労働者、農民の前衛の手中に



在る。それは恰も、日本の國家權力が、立派に、資本家、地主の前衛の手にあるのと變りはない。その意味でロシアの國家權力と、國民の最大多數を占める労働者、農民との間には、搾取關係は存しない。若し搾取關係があるとすれば、ロシアの國家權力と、國民の少數者の舊、新ブルジョアとの間だけである。それは恰も、日本の國家權力と、日本の資本家、地主との間には搾取關係は無く、たゞ在るものは、日本の國家權力と、國民の最大多數を占める労働者、農民及び勤勞民との搾取關係だけであるのと、變りはないのである。

黨にも清算すべき點があり、清算すべきものが後から後からと生れても來る。だから幾度も、共産黨のクリーニングが行はれるのである。そのクリーニングの都度にロシアの共産黨は、眞に労働者農民の前衛の名に値するものとなつて行く、と私は觀る。北氏は、その都度に、それが資本家化、否、貴族化されて行くとしても觀るのか？ それならそれで、問題をロシア共産黨の科學的解剖に移して貰ひ度い。それでなければ、一片の放談、相當罪の深い漫談に終つて仕舞ふ。

#### 四

最後に北氏の金科玉條たる『日本的』の辯がある。この文章にはそれとハツキリ書いてはない

北氏に對立して